
魔王の家の村娘 A

ごぼふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の家の村娘A

【NZコード】

N6193Z

【作者名】

じぽふ

【あらすじ】

現代日本に住む自称魔王の兄と、その妹の元に召喚されたのは、剣も魔法も使えないじく普通の村娘と小さなドラゴンだった。

逆召喚モノのラブコメファンタジー。

自HPで掲載したものを、加筆修正したものです。

それはクマル暦六百九十三年、八番目の月の事であった。世界の端で第二十九番目の魔王が世界征服を開始し、人類と魔物の戦いが始まるとしているそんな情勢の中。

その反対側の小さな村、アテューンのはずれの森。

アン＝ノンマルトンは月明かりの下、頭を垂れトボトボと歩いていた。

彼女がそうして歩くたび、稻穂のよつなお下げもゆらゆらと揺れる。

それに合わせ、虫のよつな緑色の燐光が大気の中をふわふわと踊った。

魔力の粒、ラーナの光だ。見たなくとも入ってくるその光を、未だに涙溢れる瞳に映したアンの心もまた、ふわふわゆらゆらと定まらずに揺れていた。

同じ思考をぐるぐると繰り返す頭の重さに引かれるように、足が前に進む。

彼女が、彼女の足が向かっているのは、アンが住んでいる村の麓にある小さな湖だった。

ラーナの混成率が高い、その清らかな水に足を浸すと、自らの悩みや悲しみがスウッと引くような気がしてくるのだ。

「ぐず……」

鼻をすすり、瞳に溜まった涙を服の袖に押し付けると、アンは再び前を向いた。

そして、そこで彼女は前方に黒い塊が落ちている事に気づいた。

ラーナの光で輪郭がぼんやりと映し出されているが、彼女の膝下ほどまでの大きさの、ハリネズミのようにツンツンと逆立つたシリエットを持つそれが何なのか、アンには察しがつかない。

鈍った頭で、彼女は一步、二歩とそれに近づいた。

すると、突如それがギヨロリと目を開けた。

そう、それは生き物だったのだ。

それがトカゲか口ばしの無い鳥のよつな口と、皮膜の張った翼を広げた所で、彼女はその正体によつやく気づいた。

ドラゴン……存在を確認されている魔物の中でも最強と名高い存在だ。

これは子竜のようだが、それでも熟練の騎士数十人を屠る力があると、アンは聞いた事がある。

その証拠とでも言うように、こんなに小さな体なのに、その金色の瞳に映されただけで体が竦む。

「ヒツ」

彼女が短い悲鳴を上げ一歩下がると、竜はそれを合図にアンへと飛び掛ってきた。

嫌だ、何故自分がこんな目に。理不尽だ。生まれた時からずっと。自分の人生は理不尽な事ばかりだ。誰か、誰か助けて。

アンは呪い、恨んだ。そして願つた。

その瞬間、彼女の足元から、漂うラーナとは別の、強いオレンジの光が発せられる。

足元の感覚が消えうせ、彼女は引かれるまま地面に開いた穴へ、落ちた。

「きやつ
「ぶふ」お！」

着地はすぐだった。

体が落下した感覚がしたかと思えば、すぐに何者かの呻きが聞こえ、下に落ちていたはずの体が、今度は前方へと落ちた。

「え？　え？」

自分の身に何が起こったか、彼女にはまるで理解ができない。四つんばいのまま顔を上げると、そこには落ちる直前に見た、オレンジ色の光を発する穴があつた。

穴。確かにそれは穴だった。彼女は初め、それを絵画に穿たれた穴だと認識した。

しかし、よく見れば違う。彼女が絵画かと思ったその背景は現実のものであり、穴は何も無い中空を当たり前のように穿っていた。

「魔法……？」

きっとそうだ。目にした事はないが、彼女のような普通の村娘が理解できない現象は、大抵魔法なのだ。

そうか。自分は誰かの魔法で、咄嗟にあのドラゴンから助けられたのだ。

彼女の中では辻褄が合い、アンは左右を見回した。

この部屋に自分を助けてくれた魔法使いがいるはずだ。

そうして、ある程度落ち着いた頭で周囲を見回してみると、そこはとても奇妙な空間だった。

草を細かく編んだかのような床。正面は木枠に薄い紙を貼り付けたような壁。

部屋の反対側には、派手な模様の毛布の上に板が乗っている。テーブルクロス？　いやそれならば天板は布の下にあるべきだし、あんな厚手の毛布を使う必要は無い。それに随分と背が低い。

彼女に理解できるのは、床に白い線で書かれた魔法陣と、その丸い外周に置かれた蠟燭だけだ。

その上に、件のオレンジ色の穴が浮かんでいる。

やはりこれは魔法の儀式の痕跡のようだ。

しかし肝心の魔法使いが……思いついて、彼女は後ろを振り返った。

「ひやっ」

すると、そこには黒いマントを羽織った少女がいた。

十を超えるか超えないかの歳頃であり、振り返ったアンに対し、両手を掲げた姿勢でぽかんと口を開けている。

とても高位の魔法使いとは思えない。しかしクマル国の十三代皇帝は、このぐらいの年でいかなる魔法も修めていたと聞いた事がある。

そうだ、魔法使いに年齢など関係ないのだ。

そう合点したアンは立ち上がり、振り向いてその幼い魔法使いに礼を言った。

「あ、ありがとうございます！ 貴方が魔法で私を助けてくれたんですね！」

「ふぎや！」

するとビードからか、踏み付けられにじられた猫のような叫び声が聞こえた。

「……使い魔？」

「違うわあ！」

叫び声と共に、地面が盛り上がる。

アンが尻餅をつくと共に、地面、もとい彼女に踏みつけにされたいた人物が立ち上がった。

「ヒップアタックから上四方固め後即スタンプとはどいつうア見だこの異世界人！」

アンに指をつけ叫ぶ相手は、彼女と同年代の男だった。

奥にいる少女と同じように黒マントを身につけており、どことな

く顔も彼女に似ている。

「ど、どなたですか？」

「どなたですかだと！？ まずお前から名乗れ！」

狼狽したアンが尋ねると、男は激昂した様子ながらもつともな事を言った。

「え、あ、わ、私はアン＝ノンマルトンです」

「普通な名前だな！ 異世界人のくせに！」

勢いに押された形でアンが名乗ると、初対面のはずの男が失礼な事を吐き捨てる。

その言葉が、彼女の心に火をつけた。興奮しながら、思わず言い返す。

「ふふふふ普通ってなんですか！？ ジャア貴方はどんな名前だつていうんですか！？」

「平平良良」

「ヘイヘイヨイヨイヨイ？」

「違うわ！ それでヒラタイラリョウと読むのだ。教養のない異世界人めいのかよ最近の異世界人は……」 漢字も読めない

また何か叫びかけて、男の言葉がぴたりと止まる。

「ホンと咳払いをし。

「それでヒラタイラリョウと読むのだ。教養のない異世界人め」と罵倒しなおした。罵倒には変わりない。

そんな事を言われても、男は確かに先程ヘイヘイと自分で楽しそうに名乗ったのだ。

それを別の読み方で読めとはどうこうことだ。

アンは眉間に皺を寄せた。

男も何か違和感を覚えたようで、首を捻っている。

すると男の後ろにいた小さい方の少女が男の方を叩いた。

「なんか異世界移動ゲートをくぐると現地の言葉が分かるようになるけど、たまに誤翻訳するつて書いてあるよお兄ちゃん」

手に持った分厚い本を指差し、男に何事が説明している。。

「えーっと

「あ、私は平平良舞。この男の人の妹」「はあ、初めまして。平たいラブさん」

「……うん、翻訳に關してはかなりダメみたいだね。私の事はマイつて呼んでね。えーと、アンさん」

相変わらず事態が飲み込めずに曖昧な返事をするアンに、少女がため息をつく。

「くそ、ポンコツ魔道書め。通りで安いはずだ」

男、ヒラタイラリヨウが魔道書とやらを、妹、舞から奪い取り床に叩きつける。

「でも異世界から召喚は出来たんだから成功なんじゃない?」

それを舞がなめた。

先程から彼らが頻繁に出している単語、それがずっとアンには気になっていた。

彼女はついに勇気を出し、彼らに質問をした。

「あ、あの、異世界ってなんですか?」

「だから読んで字の如く、異なる世界という意味だ。そのぐらいは流石に翻訳されているだろう?」

良がバカにしたように肩をすくめた。この、異世界? においても、そういう仕草は共通らしい。

「要するに、お姉ちゃんの居た場所の常識とか法則とかがまるで通用しない遠い場所ってことね。ちなみにこじは地球の日本って国だよ」

それをフォローするかのように、舞が補足する。

よくは分からぬが、とにかく自分は一瞬にして、遠い場所へと連れて来られてしまつたらしい。

それだけを認識すると、アンは叫んだ。

「そ、その、困ります!」

「困る?」

「だ、だって、明日も朝食の準備をしなきゃいけないし、買い物も

あるし、家族だつて心配……」

そう言い募り、アンは途中で言葉を詰まらせてしまつ。

頭の中に、今夜の出来事がフラッシュバックした。

「……心配するな。俺は別にお前のよつな一般異世界市民を呼び出すためにこんな儀式をしたわけではない」

そんな彼女をどう思つたのか。良は後ろ頭を搔きながらやうせばげる。

もしかして彼は、自分を慰めているつもりなのだろうか。アンの意識が、追憶からそんな思考に引き戻される。

それから、彼はニヤリと笑つて黄褐色の穴へと近づいた。

「俺様が華々しくトビユードする為にこのゲートを開いたのだ」

「ダ、ダメです！」

そこで、彼に例を書ひべきか迷つていたアンはよつやく戻つ返つた。

良はそこをぐぐりとしつゝが、その先には……。

「ダメ？」

彼女の言葉に振り向いた良の脇の下辺りから、黒いモノがにゅつと顔を出した。

それは先程アンが襲われた生き物。小さなドラゴンの頭であった。

「ドラゴンが……出たー！」

「うおおおおおー！」

それに気づいた良は、咄嗟の行動だつがドラゴンの頭を脇の下に抱え込む。ドラゴンが嫌がり首を振ると、それだけで彼の体が浮き上がつた。

良が両手で竜の首に掴まり、上下に跳ねながら叫ぶ。

「だからドラゴンですよドラゴンー！」
「ドラゴン、って、あの、火とか、吐く、奴、か！」
「そうですよ、火とか、ひいいいー！？」

アンの言葉が終わるよつまく、ドリーハンは口を開きやうから何か飛ばした。

それは舞のマントをかすめ、さうに床をも貫通する。

刺激臭が鼻を突いた。

「酸か！？」

良が叫んだその通り、それは高濃度の酸だった。しかしそのあまりの速度に、アンには空間が削れたようにしか見えない。

「ぬおおおー！」

アンが壁に気を取られている間に、良の更なる叫びが響く。
そちらを見ると、ゲートを飛び出した子竜の体が宙を浮いていた。
正面へとスウッと飛び出したかと思えば、重力に引かれて落ちる。
自分もあんな風に出てきたのかしら。現実から逃避しかけたアン
の頭がそんな事をぼんやりと考える。

「のおおおおおー！」

落下した子竜が、ふるふると頭を振る。その度に良が左右へと振り回された。

やがて、子竜の瞳がはつきつといひなりを捉える。

「逃げるー！」

良が叫ぶが、アンも舞もすくんで動けない。

子竜が再び口を開けた。

「くそ、こいつはー！」

良が子竜の首に回していた手を片方放し、頭上に掲げる。
それが背後にあるオレンジの光に照らされ、一瞬輝いて見えた。
そして、振り下ろされる男の手。

それが子竜を。

「おー、よーしょしょしょしょし」

撫で始めた。それも凄い勢いで。

「そんなこふー！」

している場合かと、叫びかけたアンの口を後ろから舞が塞いだ。
「お、お兄ちゃんに任せて」

そんな悠長な。自分が口を塞がれている今にも、子竜は口から酸を吐こうとしているのだ。

舞の突飛な行動に驚き、いつの間にか体も動くようになっている。

アンが慌てて逃げようとする。

「キュオオオオ！」

子竜が叫んだ。顎を上げ、背筋をぴんと伸ばす。

更に良がその背中を撫でていくと、今度はくたりと力を抜き、彼に体を預けはじめたではないか。

その顔はドラゴンなど初めて見たアンでも分かるほど弛緩しきり、良が首を搔いてやると、子竜のほうからそこを擦り付けていく。

「相変わらず、お兄ちゃんのナーテナーデはすごい……」

「ふはっ、な、なでなで？」

舞が自分の口を開放したのでアンが聞き返すと、少女はうんと真剣な顔で頷いた。

「そう、お兄ちゃんのナーテナーデは特別なの」

「と、特別って……？」

「あれを受けたが最後。どんな生き物も抗えなくなってしまうの。誰彼構わず飛び掛つて皆に恐れられていた三丁目の猛犬ペロだつて、お兄ちゃんになでられた途端骨抜きになつて、今では飼い主に撫でられても『ご主人様は好きだけど、でも私あの男の指が忘れられないの……』みたいな顔をするようになつてしまつて……」

「あ、あれは、魔法なんですか？」

しみじみと語る舞を遮り、アンは彼女に聞いた。

ドライゴンと言えば最強の魔物であり、いくら獰猛だらつと犬と比べるべくもない。

人間に屈するなど有り得ない生き物のはずだ。

それが、今は気持ち良さそうに目を閉じ、口の端から酸の涎をジユウジュウとこぼしている。

「ううん、私達は魔法なんて使えないよ」

「で、でも……私を呼び出したじゃないですか」

「あれもいっぱい準備して、色々用意して、魔道書の通りにやって偶然できただけだから」「そ、なんですか」

それでも魔法は魔法じゃないの？ とアンは思うのだが、この場所とアンのいた所では常識が違うのだと言われたこともあって、深くつっこむ事が出来ない。

「よつし、良い子だ。流石異世界最強生物。良い毛並みではないか。ほれ、首をあげろ」

良が言うよつし、よく見ればそのドラゴンは短い毛が体を覆つており、皮膚は目と同じく金色をしていた。

良が指示すると、子竜は言われた通り首を上げた。彼が両側から首の付け根辺りを揉んでやると、首を伸ばしフルフルと震える。

ドラゴンは賢い種族で人語も解すると言ったことがあるが、それに従うなどと言う話は聞いたことがない。

完全に、ドラゴンを手なずけている。

そんな事が出来る人間など、アンは知らない。

いや、人間以外なら、ただ一人だけそんな事をできる存在に、彼女は思い当たつた。

「…………魔王」

世界で唯一人……いや、正確には人間ではないが。そして倒されても倒されても現れるので単体でもないが、ドラゴンが従う存在と言えば魔物の長、魔王しかあり得ない。

いやしかし、彼が魔王？ まさか、自分を助けてくれた人がそんな事……。

「さあて、俺様の技術が異世界に通じる事は分かつたし、早速征服しにいくかー」

「魔王————！」

しかし葛藤するアンの思いは、あつさりと裏切られた。

「わっはっは、その通り！ 俺は貴様らの世界を支配する魔王だ！ 指を突きつけるアンに対し、良は胸を張り高らかに宣言する。

どうしようか、自分は本当にこれから世界征服を行く魔王に出会ってしまったのだ。

「ようし、とにかく異世界へワープだ！ お前も戻してやるから感謝しろ！」

勝手な事を言いながら、魔王は子竜の背中をポンポンと叩いた。子竜が名残惜しそうに立ち上がり、彼を見上げる。尻尾など左右に揺れたりする。

その様子に満足げに笑い、男がくるりとゲートに向き合った。何とか彼の侵攻を阻止しなければ。今は既に別の魔王が世界侵略を始めているのだ。

それなのに更に魔王が増えてしまっては、本当に人類は支配されかねない。

何とかしなければ、アンの頭がそんな思いで埋め尽くされる。そして氣づくと彼女は。

「えーい！」

「クケー！」

「ギャー！」

「お、お兄ちやーーーん！」

三重の悲鳴が響き、魔王がバレリーナのよつに回転しながら異世界への穴をかすめ、周りに立ててあつた蠟燭につっこむ。

蠟燭が盛大に音を立て倒れ、魔王のマントに引火し、彼は痛みの為か火を消す為かゴロゴロと転がる。

そのおかげで火は燃え広がらず、床を転々と焦がすだけで消火された。

「はあ、はあ、はあ」

子竜の尻尾を掴んだまま、荒い息を吐くアン。

パチンという音がし、部屋の中が眩しい光で照らされた。

「いきなり何すんだよ…」

鎮火を確認した良が、寝転んだまま抗議の声を上げる。

それから、「何をするのだ」と何の拘りか言い直した。

一時の衝動から覚め、アンが口を開きかけた時。

パキン。

甲高い音が例の穴から響いた。

全員がそちらに視線を向けると、穴であつたはずの場所に氷のような膜が張り、パキンパキンと、そこに次々とひびが入つていく。

「ああ――！」

とどめは後ろの少女、魔王の妹、舞の叫びであった。

それに呼応するように、一斉にひびが広がり、ついにはバキン

！と一際高い音を立て、欠片を撒き散らしながら砕け散った。

「うひやあああ！」

降り注ぐそれを避けようと、奇声を上げながら転げまわる魔王良だが、碎け散った欠片は地面につく前にスウッと消滅した。

「ああ――！ 異世界ゲートがー！」

そして良の頭上には、もはやあのオレンジ色のゲートとやらはない。

明かりのついた、酸と焦げた匂いが充満する部屋に魔法陣だけが残されている。

「ななななんてことをしゃがる！ しゃがりますのだ！ するのだ！」

良が立ち上がり、何度も同じ言葉を言い直しながらアンに詰め寄る。

「だ、だつて貴方が私達の世界を滅ぼすつていうから

「滅ぼすのではない支配だ！ というかどうしてくれなのだ！ 材料を集めなおすにはまた時間と費用が……」

「し、知らないですよそんな事！」

まくし立てる良の剣幕に耐え切れず、アンは手に持つたもので口の身を庇つ。

そして彼女が手に持っていたものとね。

「シギヤ――――――！」

こんな事は生まれて初めてだったのか。鈍器扱いをされた後、今まで放心していた子竜であつた。

子竜は大声を上げ口から酸を発射した。

首を捻り、それを間一髪で良が避ける。

「うおおお、せっかく懐柔したのにこのバカ者が！　お前ちょっとと抑えてろ！　バカ、こっちに口向けんじゃねえよ！」

「え、え、え、でも今すごい暴れて！　何とかしてくださーーー！」

「誰のせいこうなつたと思ってる！？」

「お、お兄ちゃん、これ以上家を壊したひママが……！」

「言つてる場合かー！」

こうして、西暦二千十年。

アン＝ノンマルトンは異世界の魔王の元へと召喚された。

「で、どうしてくれのだ」

穴が開き、床が焦げ散々になつた和室。……という場所から、アンは男、平平良良に連れられ階段を降り、革張りのソファーのあるリビングらしき場所へと案内された。

テーブルを挟んで向かい側に座つた良が、開口一番に言つたのがこのセリフである。

「そ、その、殴つた事はごめんなさいですけど、やっぱり支配とか征服とかは良くないと思います」

「一般人らしい画一的な意見だな。そもそも世界というのは既に誰かしらに支配されているのだ。だつたらちよつとぐらい俺が支配してもかまわんだろう」

「一般人に殴られて転げまわる人の支配はちょっと……」

「殴った奴が言うな！」

良が叫ぶと、その膝の上に乗つっていた子竜がびくりと首を起こす。先程の一の舞を恐れてか。彼は子竜の背中を慌てて撫でる。

「はーい、お兄ちゃんとえーっと、アンさんにも麦茶とお菓子どうぞ」

そこへ彼の妹、舞が盆の上に飲み物と紙に包まれた物を乗せてやつてきた。

彼女は兄の隣に座ると、包み紙をはずして中の物を口に入れる。アンもそれを真似してみると、口に入れた途端甘い味が広がつた。

「おまんじゅうで大丈夫だつた？」

「ふあ、はふい」

舞に問われ、アンはコクコクと頷く。なるほどこれはおまんじゅうと言うのか、美味しい、が、彼女の口では、一口で食べるには大きすぎる。

もしかして異世界の人は自分より口が大きいのかしらん。などと

考えながらアンはそれを何とか嚥下する。

「……妹の真似をして一口で食つ必要は無いぞ。というか麦茶飲め」「あ、ありがとうございます」

見かねたという様子の良が、恐らくガラスで作られている容器に入った褐色の飲み物をアンに差し出す。

それを受け取つて飲み干すと、胸のつかえも取れた。味も悪くない。

「クーラーつけるね」

言つて、舞が手に持つた何かを操作すると、ピッと音が鳴りびこからか涼しい風が舞い降りてきた。

なんだろうこれ。アンがキヨロキヨロと周りを見回していくと、良がコホンと咳払いをした。

慌てて視線を戻すと、彼はじつとこちらを見ている。

どうやら先程の質問の答えをずっと待っていたらしい。

「えーと、それで私どうすればいいんでしよう？」

「俺に聞くな！」

落ち着いた所で尋ねると、良に再び怒鳴り返された。

怒鳴りながらも子竜を撫でているのだから、器用なものだ。「で、でも私、この世界の勝手という物を知らないの……。ここつてどんな世界なんですか？」

その質問に、向かいに座つた兄妹は顔を見合わせる。

私何か変な事を聞いたかしら。などと彼女が困つていると。

「えーと、とりあえずこいつドーラゴンとかはいないね」

「あと魔法もないな」

「エルフとかドワーフとかもないね」

交互にあれが無いこれが無いと挙げていぐ一人。

「勇者も魔王もいない」

「魔王はいるじゃないですか」

良の言葉にアンがツツコミを入れると、彼は眉間に皺を寄せ、難しい顔をした。

「俺は……まだ正式には魔王ではないというか、まあいざれそういう人材だが……」

「魔王見習いといつ訳ですか」

「一気に威厳がなくなるから、その呼び方はやめろ」
言葉を濁す良に助け舟を出すつもりでアンが尋ねると、彼の顔は更に渋いものとなつた。

呼び方はともかく、認識としてはそんなところで良いのだ。アンはそうあたりをつける。

「とりあえず、良さんつてこの世界を支配してゐるわけじゃないんですね」

「こんなつまらん世界、支配する価値もない」

この世界が自分に殴り飛ばされるような人間が支配する世界ではなくて良かった。アンがほっと息を吐くと、良はつまらなうにそっぽを向いて吐き捨てた。

「そういえば、先程から無い無いって言つてしましましたね」

「ああ、何も無い空虚な世界だ」

つこには子供のように口を尖らせる良。彼はこの世界が嫌いなのかしら。そう考へると、アンの胸に言いようのない感情が芽生えた。世界を、嫌う。今まで一つの世界、その端の小さな集落しか知らなかつた彼女には、無かつた感覚だ。

「おまんじゅうはあるじゃないですか」

「おまんじゅうがあつてもなあ……」

アンがその解析不能な気持ちに戸惑いながらフォローすると、良は難しい顔をしたままではあつたが、とりあえずこちらを向く。「それに、この部屋にだって私が知らないものが沢山ありますし。……あ、そうだ。私の世界のことが知りたいです！」

「俺が聞いたのは、どうしたいかではなくどうするかだ！」

「ああ、そういえばそんなお話を返すと、良はがっくり

すつかり忘れていたアンがあつかけらかんと返すと、良はがっくりと肩を落とした。

しかしどうするのかと言われても、そもそもその話として、とアンは考える。

「えーと、良さんは私をどうしたいんですか？」

普通はこういう場合、選択権を持つのは相手側だろ？。ここは彼の世界であり、アンは加害者であり、しかも良は魔王のタマゴなのだ。

魔王相手に加害者になつた自分に、アンは今更ながら呆れてしまう。

「え、俺？」

だが肝心の魔王はといえど、何やらとても間の抜けた反応を示す。「そうです。こつ、私をどうしたいとか。どうしてやりたいとか」言いながら、アンが身を乗り出し机に手をつくと、魔王良は慌てて身を引いた。

「ば、バツカ！ 若い女の子が何言つてんだよ…」

「え？ 私何か変な事言いました？」

「ごめんねアンさん。お兄ちゃんつて人の十倍純情なの」

「は、はあ

異界ならではのやり取りだらうか。アンにはもはや恒例となつた生返事しか出来ない。

「バカ言つな！ 魔王たるもの一辺たりとも汚れていない心を持つものか！ エーと、お前にさせたいことだなー。させたいこと……」

それに対して何の対抗心を燃やしてか。良は高らかに宣言すると、こめかみに手を当て考え始めた。

もぐもぐと新しい饅頭を摘みつつ、彼の答えを待つアン。

それから、アンが更にもう一個食べようか迷つてゐる間に、良はアンに指をひとつ向けた。

「そーだ召使いだ！ お前は俺の召使いになるのだー。」

「お兄ちゃん、考えた割に発想が小学生並み」

隣の舞が、半眼で彼に呴く。

「召使ひって、具体的には何をすればいいんでしょう

「この家を全部掃除させるし、俺達の料理も毎食作つてもうつー。」

「それでだけ良いんですか？」

「え、ああああ……あー、えーと、あとゲームのレベル上げもやらせる

「お兄ちゃん……」

アンにはそれがどんな行為かは分からぬが、良の妹が彼を哀れみの目で見ている以上、大した事ではあるまい。

「私、魔王さんのする事だから儀式の生贊にされちゃうとかそういう事を考えてました」

「……それを想定していく、よく俺に判断を委ねられるな

「えへへ」

「褒められてないからね、アンさん」

「こいつ、思いの外バカだぞ」

照れ笑いを浮かべるアンに、兄妹が揃つて渋い顔になる。子童までが短く鼻息を鳴らした。

召使い……。アンはその言葉を反芻すると共に天井を見上げた。そこには、先程ドラゴンが酸であけた穴が開いている。

「そういえば、この家にはお一人で住んでるんですか？」

彼女の世界の基準では、良ぐらいの年になると自立する者も珍しくは無い。だが、このような一軒家を持つものは稀である。一山当てた冒険者ぐらいのものだらう。

「……今はそうだな

渋面のまま、良がそう答えた。

「やつぱりお父様も魔王で？」

質問を重ねると、その渋面が濃くなり、汁でも出そうな表情になる。

「極悪な人間ではあるな。自分の下半身さえ支配できないが

「へえ……」

やはり意味はよくわからない。舞が言つていた翻訳ミスとやらの所為かもしけないが、良の横を見ると彼女も浮かない顔をしている

ので、アンはそれ以上の追求をやめた。

「そんなことより」

良がため息を吐くと、あからさまに話を変えようとする。

「なんでしょう？」

やはりあまり触れないほうが良い話題のようだ。それでも、アンは彼の話に乗ることにした。

「お前、シャワーを浴びて来い」

「え！」

「ええ！？」

良の言葉に、女性一人が揃って声を上げる。

「お兄ちゃん！ 召使いなんていつて田的はやつぱり……」

「ば、違つ！ そんな意味じやねえ！」

兄妹が田の前で騒ぎ出す。子竜がうるわしおそっぽを向いた。

「その、田が腫れてるから……」

「ああ……」

「あ、あれー？」

良がボソリと漏らすと、舞がアンの顔を見、頷く。

その言葉に、アンは慌てて田元を拭った。

どうしよう、きっとここに来る前ずっと泣いていた所為だ。

そんな顔でわざわざまでずっと話していただなんて。恥ずかしくなり、ぐじぐじとこするが、それで直るはずもない。

「べ、別にそんなに田立つ訳じやない。それにわざわざも散々暴れたからな。……風呂の使い方は分かるか？」

「え、シャワーって、お風呂なんですか？」

「お前らの世界にはシャワーも無いのか」

「え、あ、はい。お風呂も普通はお金持ちの家が公衆浴場しかありません」

「……お前はしばらく独りにできそうじゃないな」

シャワーを知らないなら、さつき驚いていたのは何なのだ。愚痴つてから、良は妹の頭をぽんと叩いた。

「舞、入れてやれ」

「……はーい」

妙な間があつて、舞が返事と共に立ち上がる。

何だろ？と気になりはしたが、それよりもアンには意外な事があつた。

「親切なんですね、良さんって」

初対面の時はずっと怒っている怖い魔王だと思っていたが、あんな事をした彼女をひどい目にあわせる気もないようだし、涙の痕に気づいてお風呂まで勧めてくれる。

この人は本当は、良い人なんじゃないかしら。などと考え、アンが彼に礼を言つと。

「お、俺は、親切なんかじゃない！」

急に、良が立ち上がり叫んだ。子竜が慌ててテーブルの上に着地する。

先程から怒つてばかりの良だが、何か様子が違う。拳を握った彼の表情は、怒りと言つより後悔、もしくは自己嫌悪のよつななものに溢れている。

何か悪い事を言つたかしら。彼の豹変具合にアンは困惑した。良の方も言つてからハツとした様子で。

「その、召使いが汚れていると、俺の教育が問われるだろ？」と付け足した。

こちら側に回ってきた舞が、良の様子を痛ましそうに見てから、アンに微笑む。

「お兄ちゃんは仮免気味にも魔王なんだから、親切なんて言ひやダメだよ。こう言つてあげなきや」

そうして、彼女はアンに「こによ」と耳打ちをした。

その内容を聞き、よくは分からぬまま頷き、アンはその言葉を口にする。

「安いシンデレですね、良さんって」

「誰が安いシンデレしか――――！」

また怒られた。しかしその怒声に、先程のような内側に向けられたものは無い。

「ええい、良いから早く風呂に入つてこんか！」

それを確認したアンは、手を引く舞に連れられ、風呂場へと向かつた。

その胸には、妙な安堵があった。

VSサービスシーン

脱衣所だと告げられた場所で、アンはおずおずと服を脱いでいく。ずっと風呂と言えば公衆浴場であつた彼女なので、同性に裸を見る事など慣れたものだと思っていた。

だが、まったく知らない人間でもない、かと言つてそれほど親しいとも言えない人間と個室に入るとなると、やはり緊張した。

そう、この世界の風呂は個室なのだ。体を洗う場所と浴槽。それが人間二人分ほどのスペースしかない。

「アンさーん？」

一方で舞は体を隠す様子も無く、手に持つたホースから、ジョウロのように細かく分かれた水を出している。

「え、いえ、その……ちょっと待ってくださいね」

言つて、彼女は背中を向け、自らのスリップの胸元に指をかけ、その下の体に目をやる。

彼女が躊躇する理由は、もう一つあった。

「大丈夫だつて、私よりは大きいから」

「舞さんつて、おくつなんですか？」

「六十六」

「え、舞さんつてもしかしてお婆ちゃんなんですか！？」

思わず振り返り、この世界の人間は老けないのか。敬語を使っていて良かつた。などとアンがビックリしたり安心したりしていると、舞が違う違うと手を振つた。

「ああ、年ね。年はねー、十一歳だよ」

それから、彼女はそう答え直す。

この世界と、自分のいた世界で年の数え方つて一緒なのかしら。

一瞬疑問に思つたアンだが、舞を見る限り十一歳と言われて違和感が無い。

魔法の翻訳のおかげなのかもしない。結論は出そうにないので

アンは疑問を脇に置いた。先にでた数字についてもだ。

「十一歳なら、これから大きくなるじゃないですか……」

「アンさんはいくつなの？」

「十六です」

「あ、じゃあお兄ちゃんと一緒にだね。それならこれからもいつと大きくなるよ」

「でも、私はその……」

「ほら、早く入る。風邪引いたらうつよ

「は、はい」

言いかけたアンだが、舞に急かされ、躊躇しながらもついにスリップとドロワーズを脱ぎ捨てた。

結んでいた髪を解き、そろそろと風呂場に入る。

「すぐるから気をつけてねー」

「ど、どうも」

「で、これに座つて」

「わかりました」

「お客さん、こいつお店は初めて？」

「はい？」

「ごめん、何でもないの。お兄ちゃんにやつたら下品だつて怒られたし

勧められるままに不思議な材質の椅子に座ると、舞が不可解なことを言い出した。

アンが聞き返すと、通じなかつたのが不満らしく舞は口を尖らせる。

この世界の定型句か何かだらつか。彼女にはやはりよく分からない。

「お兄さんともこいつやって入るんですか？」

「うん、そうだよー。あ、シャワー当てるから冷たかつたりしたら言つてね」

返事をしながら、舞がそのスコールのような水をアンの背中に当

てていく。

……温かい。お湯である。これがシャワーだったのか。

彼女達の話では、この世界には魔法が無いらしい。だが、これが魔法でないなら何なのだろう。そう、アンは考えた。

「どうしたの、アンさん」

返事をしないアンを訝しがって、舞が尋ねる。

「いえ、この世界つて不思議だなーと思つて」

「そつかなー？ そっちの世界のほうがずっと不思議だと思つナビ」「良さんもそつ言つてましたね。だからひかりの世界に来ようと思つたんですか？」

「んー、私はそういう訳でもないんだけどねー。あ、皿をつぶつたほづがいいよ」

言われた通りにすると、髪にシャワーが当たる。

「アンさんつて、髪キレイだよねー。あ、全然引っかかるないや」

言いながら、舞がアンの髪の梳いていく。

「あ、舞さん？」

「髪、洗つてあげるね。シャンプーが皿に染みるから開けちゃダメだよ」

舞はしばらくシャワーと共に指でアンの髪の汚れを落としていく。それから彼女はアンの髪にペタペタと何かを塗り、頭皮を指で揉むようにして広げていった。

アンは他人に髪を触れられる事に多少の抵抗がある性質なのだが、彼女に触られ、なおかつ謎の液体を塗られてもあまり不快ではない。「うつふつふ、私もマッサージは自信があるんだ。お兄ちゃんには全然かなわないけど」

しかし何故だろう。指自体は心地よいのだが、彼女の笑いからは不穏なものを感じる。

シャワーは温かいといつのこと、不思議な寒気がアンの背中をゆっくりと上つていった。

そんな彼女に構わず、舞は喋り続ける。

「私の髪、いつもお兄ちゃんに洗つてもらつてるんだよ。お兄ちゃんの指はねー。すんごいの。気持ち良くて、いつもぼりぼりとしるうちに終わっちゃうんだ……。でも、私の髪には終わった後もぼんやりと感触が残つてて、それが時間が経つと引いていつちゃうんだけど、アルデンテのパスタみたいに、髪一本一本の芯に熱さが燻つててね。クセになつちやうの」

シャンプーとやらは、じつぜん泡のよつだ。それのおかげで上手く喋ることができない。

それができたとして、彼女のトークに口を挟めたかは分からないうが。

「会つたばっかりのアンさんに言つのもどうかと思つんだけど。私ね、今迷つてるの。何に迷つてるのかつていうと、大人になるか子供のままでいるか。子供のままでいたほうがお兄ちゃんにはいっぱい撫でてもらえると思うんだけど、子供のまじやお兄ちゃんはきっと離れて行つちゃうし、きっと大人になつたらもつと気持ち良いことが待つてると思うんだよね」

彼女の話を聞きながら、アンは何となく理解していた。ドライゴン、あのプライドと知能の高い種族を一瞬で陥落させる指。それを十一年間受け続ける事の意味を。

シャワーが再びかけられ、シャンプーが洗い流されていく。

前髪を顔に貼り付けたまま、アンは動くことが出来ない。恐る恐る、よつやく目を開けると、鏡に映つた舞がニッコリと笑つていた。

「はい。今の全部ジョーダンね」

「はい！」

「ごめんね、異世界の人には分かりにくかつたよねー」

「じょ、冗談……」

言いながら、今度はタオルに石鹼をこすり付け始める舞。

アンの頭は混乱したまま、彼女の言葉についていけていない。

冗談だったのか。こちらの笑いのツボは本格的に自分達のものと

は違つたらしい。

アンが自分でも成分のよく分からぬ深い息を吐いている。

「お兄ちゃん。体のほうは洗ってくれなくなっちゃったんだよねー。

だからアンさんで憂さ晴らしさせてね」

鏡に映つた舞が、タオルを持っていないほうの指をワキワキと動かしていた。

「そ、それも冗談ですよね」

「うふふふふ？」

「イヤ――！」

アンの悲鳴が風呂場に響く。

その日、その場所で、アンは魔王より恐ろしい人物を見たのだった。

「ただいま戻りましたー……」

アンがふらふらと居間に戻ると、雑誌を読んでいた良が子竜と一緒に顔を上げた。

「物凄い悲鳴が聞こえたが、無事か？」

「き、聞こえていたなら助けてくださいよお」

「どうせシャンプーでも目に入つたんだろう？　そして俺が何事かと駆けつけると、キャーエッチーとか言って、その顔に桶でも投げつけるつもりだつたに違いない。お前のような一般異世界人がやることなど分かりきつているのだ」

そして意味不明なことをつらつらと言ひ。多分これは「冗談ではなく本気で言つてはいるのだろう。もはやそれがどちらであろうが、今のアンにはどうでも良くなつていた。

「あー、良いお湯だつたねー。アンお姉ちゃん」

そんな彼女の後ろから舞が現れ、アンに意味深な視線を送る。

「は、はい、舞様……舞ちゃん」

アンは彼女にギクシャクと言葉を返す。まさか年下の同性に、あんな辱めを受けるとは予想していなかつた。

良は一人に不審そうな視線を向けてから、まあいいと咳払いをして、その格好は何だと、もつと不審そうな目で見た。

「何つて、パジャマだよ」

それに対し、舞がさらりと答える。

「へそが出ているではないか」

良に指摘され、アンはまるで雷が落ちたかのように急いでへそを隠した。

「私のじゃサイズが合わないんだもん」

アンが着ている服は、パジャマというらしい。

この世界の標準的な寝具だと舞は言つており、ゆつたりと作られている為アンでも着る事はできるのだが、如何せん手足や臍の丈が足りない。

舞がこれで良いのだというので従つたが、やはりこの着こなしは間違つているようだ。

「……風邪引くぞ。腹巻でも出してやれ

「りょうかーい」

返事をし、舞は一階へと上がつていった。

「しんせ……ツンデレにどうも」

「だからその奇怪な日本語はやめろ」

親切、と言いかけてアンが言いなおすと、良は辟易とした顔で返した。

彼は手に持つたおまんじゅうを、膝の上にいる子竜にやつしている。

「食べさせちゃつて良いんですか？」

「……異世界最強生物が、まさか饅頭詰まらせて死ぬなんて事はあるまい」

それでも少しは不安に思つたのか、彼はそれを千切つて『えはじめた。

何となくそれを微笑ましく思いながら、アンは彼に向かいに座る。「というか、こいつの餌には何をやればいいんだ？」

彼女の表情が気に入らなかつたのか。やはり良は瀟然とした顔をしながら、アンに問いかける。

「んー、確かに何でも食べますよ。牛とか、人間とか」

「人が手を差し出してるときに、不安になるようなことを言つな」

「だつて、ドラゴンってそういう生き物なんですよ。普通の人は傍に居たいとすら思いませんよ」

それを平然と飼いならし、飼い犬扱いである。魔王といえど恐れは無いのか。アンもさすがに呆れて、彼にそう言つた。

「その割には平氣そうだな。一般異世界人代表」

「え？ ああ、何だかよく分からぬ事が続いた所為で、感覚が麻

痺してきちゃって

良に指摘され、アンはようやく血の矛盾に気づいた。

出会ったときは恐怖で震えが止まらなかつたと言ひのこ、今はこのドリーナンに愛嬌のようなものまで感じ始めてこる。先程、風呂場で死ぬより恐ろしい田にあつたからだらつか。

それとも。

「私の世界との繋がりって、この子しかいないんですね」
そうだ、今の自分はまったく知らない世界で、一人ぼっちなのだ。今更それを意識し、アンは胸の中をじんわりと締め付けられるような感覚を覚えた。

「そ、その、俺は謝らんぞ」

「あ、ごめんなさい。良さんを責めたい訳じゃないんです。あの穴を壊したのは私だし、そもそも助けてもらわなかつたら、この子に食べられてましたから。それに……」

あからさまに動搖している良に、アンは慌てて弁明する。
更に出かかつた言葉を、彼女は途中で飲み込んだ。

「どうした？」

「い、いえ……」

何となく、彼に対しても『それ』を言つのは憚られる。彼女自身それをはつきり断言できる訳ではなかつたし、それを言えばきっと、何故と問われるであろうから。

良が押し黙り、アンも口を開けない。気まずい沈黙が降りた。

「ただいま。あれ、どうしたの？」

そんな空氣の中、舞がピンク色の布を持つて戻ってきた。

彼女は両者の顔を覗き込むが、良は首を横に振り、アンは曖昧に笑うだけなので、諦めた様子でアンの前に立つた。

「アンさん、ばんざーい

ばんざいといつ言葉が、アンには何故か両手を上げるという意味だと伝わる。

彼女は言われた通りに両手を上げ、それから舞が一いやつと笑つて

いる事に気づき、戦慄した。

が、舞はその伸縮性のある布をアンの頭の上から通し、腹の辺りで止める何もせずに体を離した。

「期待しちゃった？」

「し、してません！」

ニヤニヤと笑つたまま良の隣に座る舞に、アンは顔を赤くして言い返した。

ワザと先程の風呂の件を連想させたらしい。

良はもちろん訳の分からないといった表情をしている。

恥ずかしくなり、アンはもじもじとその腹巻とやらを弄った。どうやら編み物のようで、彼女の腹にぴったりとくっついている。なるほど、確かにこれならお腹を壊さなくて済みそうだ。

この伸び縮みはお婆ちゃんが編んでくれたマフラーと同じ原理かしら。

そう考えた後、祖母の顔を思い出してまた気分が沈みそうになり、アンはプルプルと首を振った。

「さっきから何だ」

不審極まる、といった表情でこちらを見てくる良。

アンは彼に愛想笑いを浮かべながら、何か誤魔化す材料はないかと周囲を見回した。

それから、ふと視線が良の膝の上にいる子竜へと向く。

「あ、名前をつけませんか？」

「名前？」

「そのドリーヴンのです。飼うんですよ？」

「まあ、野に放つ訳にはいかないからな」

問いかけると、良はふふんとシニカルに笑いながら答えた。

「それにこいつは、我が魔王軍の第一の部下だ」

「それって私が第一なんですか？」

「違うわ。お前みたいなファンタジーパンピー略してファンピーは

一生召使いだ」

第一はこいつ。と、良は妹の頭に手を置き、ひと撫でした。

あ、舞ちゃん今一瞬凄い顔した。などと確認しつつ、アンは頷いた。

「そうですか……」

安心したような、役立たず扱いには少しガッカリしたような、微妙な気分である。

付隨する思い出がまた顔を出しかけて、アンはまた首を左右に振つた。

「……それはクセか何かなのか？」

「い、いえ、そうだ。そうじゃないですよ。名前ですよ名前。飼うにしても部下にするにしても名前がないと不便ですよー！」

もはや心配そうな顔になつてきた良を誤魔化し、アンは若干大げさに主張する。

その勢いに押され、ぎょっと身を引いてから、良はそれを恥じるようになつて口ホンと咳払いをして彼女に告げた。

「名前ならもう考えてある。クッキー、もしくはキクだ」

「えーっと、由来を聞いても良いですか？」

「こいつ、一見黒いが下に金色の皮膚があるだらつ。黒と金だ。だからクロキンとも考えたのだが、それでは安易すぎるんでクッキー。もしくは逆さにして縮めてキクだ」

「異世界の人つて、不思議な発想をするんですね」

「いや、お兄ちゃんだけだから。ていうか外見から離れられない時点でもう揃つても安易だと思うよお兄ちゃん」

「う、うるさいわ！　ああもうキクで決定」

女性陣に代わる代わる言われ、良はヤケクソ氣味にそう断言した。

「良いかキク。俺とお前で世界を征服してゆくのだぞ。代わりにお前は我が部下一号に昇格してやる

言いながら、良は子竜 改めキクを持ち上げ語りかけた。

「あ、ちょっとお兄ちゃんズルい！」

まるで交換条件になつていないとアンは思うのだが、抗議する舞

を見るにそれは重要な部分らしい。

それに対し、キクは短く「くああ」と答えた。

もしかしたらキクはもう人間の言葉が分かるのかもしれない。アンはそんな事をぼんやり考える。

「よしよし、良い子だ」

その返事に良は気を良くし、キクを片手で抱きなおしその頭を撫でる。すると、その遠まわしな由来である金色の皮膚が風に揺れる稻穂のように覗いた。

キクが目を細めおどがいを上げると、良は鼻から息を抜きながら頬を緩める。

良が初めて無邪気な笑顔を見せた気がし、アンも釣られて微笑んだ。

「な、何だ」

「いえ、良さんって可愛いになつて思つて」

「……放り出すぞお前」

「ええ、褒めたのに！？」

アンが机に手を置き抗議の声を上げると、良は静かにキクを置き、机越しのアンの頭を両手で掴んだ。

「お・前・の・世・界・で・は、可愛いと言われて喜ぶ魔王がいるのか！？」

一語ずつ区切りながら、良が掌底でぐりぐりとアンのこめかみを嬲る。

その顔にはもはや先程までの笑みは無い。

「アンお姉ちゃん良いなあ」

「良くないですって！ 痛い痛い痛い！」

「クエエ」

指を咥えながら羨ましがる舞に叫びながら、アンはその痛みに悶え苦しんだ。

相手の気持ち良いツボが分かるという事は、痛みもより効率的に「えられるという事なのか。

まるで直接押しつぶされているような脳から、そんな言葉を絞り出される。

しかし、そうして騒いでいる内に、彼女の落ち込んだ気持ちはいつの間にか消えていたのだった。

次の日の朝。

「ふあああ」

「くふええ」

同時に欠伸をしながら、良がキクを抱え階段を降りてくる。
まるでぬいぐるみが無いと眠れない子供みたいですね。

アンは彼にそう言おうかと思ったが、昨夜のこめかみの痛みを思
い出し、重音重した。

「おはようじさこます、良さん、キクちゃん」

しかし顔の緩みを抑えることは出来ず、妙な笑顔でアンは一人と
一匹に挨拶する羽目になった。

「おはよ……と、お前は何をしているのだ」

寝ぼけ眼のまま普通に挨拶を返しかけた良だったが、魔王の沽券
に関わるのか彼は途中でその言葉を飲み込むと、誤魔化すようにア
ンを睨みながら尋ねた。

「おはよお兄ちゃん。何つて、料理だよ」

アンの隣に立つ舞もまた、振り返つて彼に説明をする。

彼女らは良より一時間ほど前に起き、顔を洗い朝食の支度を始め
ていた。

パジャマの上にエプロンをつけ、共にキッチンに並んでいると、
自分に妹が出来たようでアンには嬉しかった。

昨日の風呂場での出来事を言なれば、もっとすんなり彼女を妹
のように思えたはずなのだが。

「料理つて、お前らそんな事できるのか?」

「お兄ちゃん。私にできると思つ?」

「おい」

問い合わせ舞に、良が半眼を向ける。

「あ、私は一応できますよ。酒場で酔いを作つてたこともあります

し

「アンは良を安心させるべくやつぱるが、彼は寝起きの所為だけでは無さやうな田つきの悪わで今度はアンを見る。

「お前が、料理なあ」

「どうも自分は彼にあまり信用されていないらしい。」

「食材も大体あちらと一緒でしたし。トマトとか、レタスとか」
良を安心させるため、言しながらアンは、今きぞれんでいた食材を見せる。

異世界にあっても人間という種族は存在するよう、野菜もまた同じものは存在するらしい。

冷蔵庫とやらを開ける際はどんなゲテモノが飛び出すか、アンも戦々恐々としたものだが、取り越し苦労だったようだ。
中身はほぼ彼女の知っている食材ばかりであった。

「あと、この毒フニフニ草とか」

言いながら、アンは底が赤くなっている、彼女の世界でもお馴染みの縁草を良に見せた。

「そりやほづれん草だ！ そんな素材この世界にはねえよー。 つい
うか毒つて名前ついてるじやねえか！ 何作ろうとしてるんだよー！」
だが、良はアンが掲げた葉を見て怒涛のツッコミをする。
「え、大丈夫ですよ。 いつやって毒ジャムを塗れば毒は中和されま
すから」

「だからそれはフニ何とかじやねえ！ 何塗つてんだー？」

「そんな、どう見ても毒フニフニ草なのに。」

信じられない思いでアンは手元にあるジャム塗れの野菜を見た。

「お兄ちゃん近所迷惑」

「誰の所為だ!? 生のほづれん草にジャム塗った時点でお前もお
かしいと思え！」

叫ぶ良の腕から、つるそつてキクが逃げる。

それを少し意外に感じながら、アンは見つめた。

「はあ、はあ、ああ、あいつも俺にべつたりといふ訳では無ござりし

いな。昨日も寝ると起きはクッシュョンを勝手に裂いて、俺に背を向けて寝た」

「おー……」

息を整えながら、良がアンの疑問を察したらしく答えた。
流石は異世界最強生物。心まであのナーテナーテに侵されてはいなかつたらしい。

自らの世界の最強がこの世界の魔王に屈しなかつた事に、アンは妙な感動を覚えた。

「まあ、今朝はこいつの撫でるという催促で起こそられたがな」

……ただ単に氣まぐれなだけかもしれない。

本当に、普通の剣では虫刺され程度の傷すら『えられない存在なのになあ。

感動が無駄になつた氣がして、アンはため息をついた。

「それより、料理は本当に大丈夫なんだろうな?」

「あ、はい。毒フニフニ草さえ抜けば多分普通のサンドイッチですから」

「アンさん、だからフニフニじゃないって」

良の喉と近所の耳を心配してか。さすがに舞がアンに対してもツッコミを入れる。

そうでしたと謝つてから、アンはとつあえず毒……ほうれん草は別の器に入れておく。

それを嫌そうに見てから、良はしかしと話題を変えた。

「あちらでもサンドイッチはあるのだな。もちろん別の名称が翻訳されているのだろうが。もしや由来はサンドイッチ伯爵か?」

「あ、はい。一つ目殺しのサンドイッチ伯爵が、相手を石の壁で押しつぶす魔法をヒントに、この料理はできました」

「Hピソードはまるで違うのだな……」

「じゃあこの具つて、つぶれた生き物がモデルなんだね……」
由来を聞いてげんなりしたような顔をする一人。

そういえばそんな理由で、これが嫌いな人もいたつとアンは思

い出した。

「それが嫌ならこちらのシチューもありますから」

「あ、そうだ。」舞はインスタントのに野菜を入れただけだから、安全だよ」

アンが鍋に入った白いシチューを指し示すと、舞がそう補足する。あの四角い塊を鍋に入れてかき混ぜるだけでシチューになるというのだから、本当にこの世界の技術は大したものだ。

「安全と評される料理と言うのも、微妙に食いたくなくなるな」

「そんなに不安なら、お兄ちゃんも手伝ってくれれば良いじゃない」

「魔王が料理など、似合わないにも程があるだろ?」

「そう言つて肩をすくめる良。」

良いと思うのになあ、お料理魔王。などとアンが思つてゐる間に、彼は背中を向けてテーブルへと向かつてしまつた。

「どうがない人、と二人は顔を見合させ、料理の続きを作ることにした。

それから十分後。

良の横には舞。膝の上にはキク。向かい側にはアンといつ昨日と同じ配置で、食器を並び終えた彼らは座つていた。

「いただきまーす」

舞がそう言つてサンドイッチに手をつける。良も同じよつ口の中でそう挨拶し、それを口に運ぶ。

この世界では、食前に主神レンギ様にお祈りする習慣は無いらしい。

まあ、神様も流石に異世界までは見ていないだろ?。

そうアンは判断し、彼らに倣つていただきますと言つてサンドイッチに手をつけた。

「ど、どうでしょう」

「ん、まあ普通だな」

「そうですか……」

恐る恐るといった感じでサンディッチを租借し終えた良に感想を聞くと、特に面白みの無いコメントが返ってきた。

「まあ、サンディッチですからそう極端な事にはならないですよね」「なりかけただろうか」

良がジト目でジャム漬けのほうれん草を見る。

試しに齧つてみると、なんというか草とジャムの味がした。こんなに似ているのに味がここまで違うとは、不思議なものだ。アンが文字通り苦々しい経験を積んでいると、舞が口を開いた。

「そういうえばお兄ちゃん。重大な問題が発生しました」

「ほう、言つてみろ」

拳手をする舞に、教師のように促す良。この世界でもこいつやり取りは一緒らしい。

「アンお姉ちゃんが着られる服がありません」

「……お前の物ではサイズが合わないか」

「上は何とかいけるんだけどねー。下がワカメっしゃつの」

「ぶつ」

舞の言葉に、良が口の中の物を噴出した。キクが迷惑そうにそれを見上げる。

「ワカメ?」

その言葉は上手く変換されていないようだ、アンには意味が分からぬ。

現在のアンの服装は、昨日借りた寝巻きのままである。

……この世界のスカートはやたら短く、さらにアンが履いているのはドロワーズである。

今朝は早くに起きて色々試しては見たものの、全て下からはみ出してしまった。

ワカメってそういうことかとよつやく当たりをつけ、アンは赤面した。

「だから、今日は皆で買い物に行こうよ」

それを楽しそうに見てから、舞はキクにかかつた内容物をほりつていてる良に提案した。

「面倒くさー。お前らだけで何とかならないのか？」

「私お金無いもん。お母さん資金渡してくれるなら手つかぬけど？」
舞は両手を広げた後、ニヤリと笑った。お母さん資金……一体なんだろ？

アンが首を捻っている間に、良と舞が言い争つていてる。

「お前にサイフなんて握らせたら、スッカラカンにしてサイフまで落としてくるから却下」

「お金入ったまま落とすよりマシでしょ？」

「最悪中の最悪じゃないだけだろうがー。その浪費癖と落し癖を直せといふ話をだな……。もう良い、しょうがないから俺も付き合つ」

「最初からそう言つてくれれば良いのに」

「はいはい、俺が悪かったよ」

ため息をつく良と、言いながら嬉しそうにしてる舞。

いつして見ると普通に仲の良い兄妹に見える。

やはりあの風呂場での言葉は冗談だったのかしら？アンはぽんやりと考へた。

「じゃあ撫でて撫でて」

「意味が分からん」

言いながらも、良は抵抗が無駄だと悟つてているのか、それとも自らも撫で中毒なのか妹の頭を撫でる。

「んっ……」

田をつぶり、舞はその感触を一時も逃がさないようにしてていうようだ。開いた口に紅潮する頬。髪をかき上げられる度に漏れる吐息。やはり、兄の愛撫に彼女が耽溺しているのは本当のようだ。

アレつてそんなに気持ちいいのかな。思つてからアンは、プルプルと首を左右に振つた。私つたら何を考えているのかしら。

「おう？」

ふと、良の指の動きが止まつた。見れば、キクがテーブルの下か

ら顔を出し、彼の服を引っ張っている。

どうやら自分以外を撫でていることが気に入らないらしい。

「……むつ」

目を開けた舞が、それに気づきキクを睨む。

キクもまたアンを睨み返し、彼女らは傍目にも視線の火花が幻視できるほど激しく睨みあつた。

異世界最強生物に喧嘩を売るなんて無謀な！ とも思うのだが、舞の底知れなさを考えると何故か良い勝負をしそうな気もしてしまつ。

いやいや、そんなことより止めなければ。アンが声を上げようとした時。

「あー、バカ、喧嘩すんなお前ら」

良が、舞とキクの頭を同時に撫でた。

へにやりと、双方の力が抜ける。相変わらず魔法のような指だ。

「何だ、お前も撫でて欲しいのか？」

「りょ、良さんは、自分の手を傾国兵器だと自覚してください！」

アンの視線に気づいた良が、こちらを見てそんな事を言つ。

「冗談ではない。自分も撫でられてしまつたらどうなることか。

それから緩みきつた一人と一匹の顔を見て、この人と暮らしていく本当に大丈夫だろうかとアンの心には再び不安が渦巻くのだった。

「あのー。本当にこれで外に行くんでしょうが」

玄関に手をかける段になつて、アンはもう一度確かめた。

「三回目だぞ。いい加減覚悟を決める」

振り向いた良が、呆れ顔で彼女を見る。

「で、でも、キクちゃんをお留守番させるのも不安ですし」

「きちんと言い含めたし、餌もたんまり置いておいたから平氣だろう」

流石にドリゴンを街に連れ出す訳には行かないでの、今回のキクは留守番である。

置いて行かれることを嫌がつたキクも、最初は良の服の端に噛み付いては破り噛みついては破りをしていた。

だが良が、「帰ってきたら千回撫でてやる」と約束してやつと大人しくなつた。

もしかしたらあの子にも翻訳の魔法が効いているかしら。
だとしても数は数えられるのか。色々と疑問は沸いたが、今はそれよりも大事がある。

「どうか、個人的にはお前を一人にする方が怖い」「
わ、私を何だと思ってるんですか！？」

「暴走特急が村娘の服を着たような女」

「意味は分からぬけどバカにしてますよねそれ」

「まあ今は村娘ルックじゃないけどね」

アンの後ろで靴を履こうとしている舞が、笑顔で告げる。

その通り、今のアンは昨日こちらに来た時とはまるで違つ格好をしていた。

上下共に良の私物、Tシャツとジーンズというのだったかを着せられ、足にはサンダル……これは彼女も知つてゐるが、材質がとても柔らかい物でできていた。

しかし彼女が躊躇つている理由はそれではない。

「大丈夫だよ。ズボンなんだから、何もつけてなくても下からは覗けないって」

「や、そ、それはそうなんですけど」

舞がフォローするが、人に言わると恥ずかしさが更に増す。

そう、今彼女は、下着をつけていなかつた。

「どうしても、下に履いちゃダメなんですか？」

「だってラインが崩れちゃうじゃない」

「という事は、今見えてるのはそのままのラインって事じゃないですか！」

「あはは、まあお兄ちゃんのだしそんなにペッタリはしないでしょ？」

「はい、それは確かにそつなんですけど、ぶかぶかなので今度はズリ落ちきちゃつて」

言いながら、アンは何度目か分からぬジーンズの上げ直しをした。

サイズの合うベルトも、この家には存在しなかつた為このズボンはひどく不安定である。

「腰の下の所で履けばいいんだよ。ローライズって言つて流行つてるんだから」

「す、凄いんですね」ひちの世界つて

「……」

バタン。

アンが感心していると、良は無言でドアを開け外に出て行つてしまつ。

「あ、あれ、良さん？」

「お兄ちゃんには刺激が強すぎたかなー」

何の事だろう。アンがそう思つてゐる間に舞も彼女を追い抜き外へと出て行つてしまつ。

「あ、待つてくださいよー！」

仕方なく、アンも意を決して外に出た。

「あつづら———い！」

外に出ると、いきなり舞が叫んでいる。

アンも外に出てみて驚いた。

「この世界は、今夏真に盛りた 分かりて いたはずだか
ラーという道具に慣れすぎて、忘れていた。 あのクー

まじい鳴き声が眩暈を加速させる。

まあ、十母も廿の母」これまで、残りの「田ぐらこ騒あたぐもなる」。夢ニ禪の時、御一聲、ハノサ威靈ハノ、ウム、ウム、ウム。

「何かこう、まとわざつこめてくる暑さですね」

「この国は湿度が高いからね。アンお姉ちゃんの所は違うの？」

夏正暦のたと題し拂はる。……」ハハハ、嘔吐シスジメ
なつて嘔吐。ハハハの剥はれのサビタガは、

「……羨ましい事だな。やはり」の世界は糞うだ

同じくだれた様子でポケットに手をつつこみながら、良が呟く。

「一年中雪つて、雪かきが大変そう

「雪で建物も潰れちゃいますしね。だから首都のハウリワダンではゴーレムによる除雪をしたり、道や建物を魔法で暖めたりしてるんですよ」

「え」

「お前から、初めて異世界らしハ話を聞いた気がする」

良が珍しく、目を丸くして驚いている。アンも入づてに聞いた話なのだが、彼がこう素直に驚いてくれると妙に嬉しい。

「そのこちら基準で妙に古臭いリアクションが異世界で流行りかはともかく、お前の功績では一切無いからな」

胸を張るアンに無愛想に告げた後、良が歩き出す。

アンと舞もその後に続いた。

「まあ、せつかくだからもつと異世界の話をしていいぞ。ただし涼しい話限定だ」

口調は仕方なく、といった感じだが、顔にはうつすらと笑顔する浮かんでいる。

自分の発言で彼からそれを引き出したのは初めてだ。

嬉しくなり、アンはとつておきの話をする事にした。

「あ、じゃあ街に現れた一匹のゾンビによつてジワジワと壊滅していつた大都市レグンワダンの話を……」

「か、怪談も禁止だ！」

だが、アンがそれを話し始めた途端、良は慌てた様子で耳を塞ぎ叫んだ。

「良さんって……」

「お兄ちゃんって、たまに私も引くぐらいあざといよね」

魔王を田指しているとは思えない彼の醜態に、女性陣が冷えた視線を送る。

仕方なくアンがあちらの世界での夏の快適な過ごし方、冬の風物詩などを話している内に、目的の場所に着いた。

アンにとつては周囲の建物は皆同じように見え、道は複雑に曲がりくねり地面もずつと灰色で似たような景色に見える。

この道を彼らがどう迷わず歩いているのかが気になつたが、良が話にご満悦なようなので、自ら的好奇心を満たすのは後回しにした。

「うむ、美女型スノーコレメンタルの抱き枕か！ 僕も魔王になつた暁には是非使用しよう！」

ご満悦になつたのは涼しくなつたからなのかしら。思いながらもアンは目の前の建物を見つめた。

家が五つほど積みあがつたような高い建物である。先ほどまでもこういった物（舞はビルと呼んでいた）はあったが、これは横にも長い。

まるで家のお化けのよつたと、アンは思つたが、良は怖がつていよいよだ。

アンが見上げている間に、良が正面にあるガラスに向かう。

「危ない！」

きつと良さんは抱き枕で頭がいっぱいになつてそれが見えていいのだ。

アンは慌てて声を上げたが。

「ん？ 何がだ」

グオーと静かな音を立てて、ガラスのほうが良を避けてぱつくりと左右に割れた。

「ほえー。魔王ともなるとガラスが避けて通るんですねー」

「いや、アレただの自動ドアだからね」

感心するアンに、後ろから舞がツツコミを入れた。

自動ドアとな、と、アンもそのガラスの前に近づいてみると、確かにそのガラスが自分を左右に避けるではないか。

離れてみると、閉まる。

しゃがんで近づくが開く。

「良さん！ これ凄いですよ良さん！」

「五歳児かお前は！ 良いから早く入れ！」

「アンお姉ちゃん、周りの目もあるから後でね」

舞も流石に恥ずかしそうにして、アンの背中を押す。

周囲を見ると、確かに他の人間が何事かこちらを見ている。

そういえば、王都クマルワダンに初めて来た人間は、入り口にいる人間に調教された警備用の偽竜ワイバーンを竜だと勘違いし、慌てたり逃げ出したりする事があるらしい。

ああ、これってそれと同じなのか。

そう合点がいくと、アンも赤面し、こそそと中に入る。

左右を見回すと、人々が何かを食べていると思えば、隣では靴が売っている。

そういえば、自分は買い物をしにきたのだった。という事は、こ

「は様々な店の集まりなのだろう。

それとも室内でする市のようなものか。

アンはそう当たりをつけた。

「キヨロキヨロするな。まつたく……」

注目を受けた所為か、不機嫌になつた良がアンを叱る。

だが、振り向いたその顔が、ぱつと一点を見たかと思えば、すぐ
に前へと戻される。

「良さん？　えーと、まずは何処へ行きましょう？」

「まずは下着かな。ていうかブラ。早急に」

後ろにいた舞が、良の代わりに答える。彼は耳が赤く染まつてい
た。

「え、ブラってなんですか？」

「アンお姉ちゃん、ごめんね」

「はい？」

「そのTシャツ、透けてる」

「透け……えええ！？」

彼女が自らの体を見下ろすと、そこには汗で張り付き透けた白い
Tシャツがあつた。

あれ、さつき私色んな人に見られたよね。という事はもしかして
その人達にも……。

「……み、み、みら、みらみらみら」

「ちょっとお姉ちゃん！？　氣をしつかり！」

店内は、あのクーラーという代物のおかげで大分涼しい。
しかしアン自身の体温はぐつと上がり頭を煮立てさせ、外にい

たとき以上の汗を彼女に流させたのであつた。

「うう、もうお嫁にいけない。婿も来ない」

「だ、大丈夫だ！ 上手い具合に胸の文字で大切な部分は隠れてい
た！」

「割としつかり見てたんだねお兄ちゃん」

両手で胸を隠しながら歩くアンを、良が懸命に慰める。だが、そ
れはあまり効果があるとは言えない内容だった。

タオルで丹念にふき取ったおかげで既に透けてはいないのだが、
アンは怖くて手を離せずにいる。

「とりあえず、あのお店で良いかな」

ふと、舞が前方にある店を指差す。人形の胸に巻きつけられてい
るのがそのブラと言う奴だらつ。そういえば昨日風呂場で舞もつけ
ていたなとアンは思い出した。

形状まではよく覚えていないのだが……。

「おい、あっちのバーゲン品で良いだろ」

対して良が指差した方向には、その下着が山積みにされていた。
「何言ってんのお兄ちゃん。アンお姉ちゃんは初ブラなんだよ？
サイズ分からないんだよ？ 店員さんに測つてもらつて、良いのオ
ススメしてもらわなきゃ」

「むう、そういうもの、なのか」

先程の負い目もあつてか、良は舞に逆らえず、押されるままにな
る。

彼の承諾を得たと決め付けたらしい舞が、アンの手を引いて店の
前まで歩く。

「アンお姉ちゃんは外人の振りしててねー。話が食い違つちゃうと
めんどいだから」

「ガ、ガイジン？ メンドイ？」

聴きなれない言葉達に、アンの頭にはクエスチョンマークが踊つ

た。

「要するに、言葉が分からない振りしてくれつたりやーって事だわさ
ね」

「あの、私既に舞さんの言語がよく分からないんですけど……」「
まあ、店員さんが何を言つても二口一口しだれば大丈夫だよ。あ、
お兄ちゃんがお財布持つてるんだから早く来てー」

アンに答えながら、舞は後ろで不貞腐れている表情の良を呼び寄せた。

良がゆっくりと近づいてくる。

彼らの話では舞は浪費が激しいそのので、彼女の好きに買わせる訳にもいかないのだろう。

「すみません。あの、サイズを測りたいんですけど」

「いらっしゃいませ。はい、かしこまりました」

舞が尋ねると、人の良さそうな若い女性の店員がそれに応えた。

「こっちの女の子なんですけど」

「はい、それでは奥のほうへご案内いたします」

言つて、店員は彼女らをカーテンで仕切つた場所へ案内する。
良はそこまでは入つてこず、手前で彼女らを待つているようだつた。

「えーと、では上を一枚脱いでいただけますか?」「ええ!？」

「『ごめんなさい』下はつけないのでちょっと」

「え、そなんですか?」

「そういう風習の国の子なんです」

「あ、なるほど不勉強でした」

舞が言い切ると、多少押された形で納得する店員。
それから彼女の胸にメジャーを当て、寸法を測つていぐ。

「七十四のAですね」

「なるほどー」

店員の報告に、舞が曖昧な笑顔をアンに向ける。

その意味が分からぬアンも、やはり曖昧な笑顔で返した。

「ありがとうございます。それで……」

舞が店員と相談し始める。それはもはやアンには理解不能のやり取りであった。

黙つていろと言われた事もあり、二口二口としたまま口を出さずにいると、やがて舞が良を呼ぶ。

金額が告げられ、彼は渋面を作りながらもサイフを開けた。

「はい。アンお姉ちゃん。パンツも一緒にだからあつちでつけようね」そう言つて、舞がカーテンに仕切られた部屋へとアンを導く。

「え、あ、じ、自分で」

抗議しようとしたアンだが、舞が店員を見つつ人差し指を立てるので、慌てて黙る。

「それにこれ、寄せて上げる奴だから、やり方知らないと損だよ？」寄せて上げる？ 何の事だろう。アンが不思議に思つて彼女を見ると、舞は胸を両脇から、寄せて、上げて見せた。

なるほど、そういう事か。納得した。うん、興味が無いと言えば嘘になる。

しかし、これは異世界の技術を体感してみたいという純粹な興味だ。自分に言い訳をしながら、アンは舞に続き、カーテンの中へと入つていった。

そして数分後。

舞に下着を装着してもらったアンは、時折自らの胸元を馴染ませるように擦りながら歩いていた。

先程から妙な違和感がある。

「最初はみんなそんな物だよ」

舞が苦笑しながら彼女に言い聞かせる。

まるで舞のほうが年上のような言いづだが、これに関しては確かに彼女の方が先輩であるので仕方ない。

「上へやつて押さえつけて、その、小さくなつたりはしないんですか？」胸が

「ううん、大丈夫みたいだよ。むしろちゃんと着けておいたほうが、成長するみたい」

恐る恐る尋ねると、予想外の答えが返つてくる。

お、大きくなるんだ。この世界の品物って凄い。世に数点しかないうマジックアイテムですら、本当に効果があるものは稀だと聞くのに。

アンは思わず胸元に指を入れ、つけたブラジャーを確認する。着ける前は丘だった胸が、今は小山ではあるがきちんと一つ、存在を主張しているのも嬉しい。

ふと、視線に気付く。

見上げると、良と一瞬目が合つ。

しかしそれから彼は、もげるのではないかという程に首をあらぬ方向へ向けた。

「お兄ちゃんのムツツリ」

「ななな何の事だか一向に分からねーなー！」

舞が不機嫌そうな顔でボソリと言つと、良はよく分からぬ口調になりながらそう返す。

私を、見てた。何か言い忘れた事があつたかしら。アンはそう考えてから思い出し、ポンと手を打つ。

「七十四のAだそうです」

「報告せんでも良いー！」

アンが告げると、良は顔を真つ赤にして怒った。

これではないらしい。なんだろう。これは真名のことくあまり人には言わないほうが良い数字なのだろうか。

そしてそれから彼女は、もう一つ言い忘れた事があつたと思い出した。

「そうだ、良さん。お金もありがとうございました。あの、私……」

「それも言わんで良い。俺の金じゃないしな」

言いかけたアンを遮って、良は言ひ捨て、先程より早足で歩いていつてしまった。

「あの……？」

自分の金ではないとこりのばらう事だらう。不思議に思つて舞を見るが、彼女も答えたくはないようで、苦笑しつつも説明をしたりはしてくれない。

お金の話なんて下世話だつたかしら。アンが首を捻つていると、やがて前方の良が階段の前で立ち止まつた。

「わああ……」

階段、だと思われる。が、動いている。彼女の目の前にある急角度のそれは、足元からブロックがせりあがつては新たな階段になる、動く階段であつた。

「エスカレーターって言つんだよ」

アンに説明してから、舞がそれに乗つて上がつていへ。

「二階に行くぞ」

不機嫌な顔のまま、良もそれに続いた。

え、何で動くのこれ。昇りながら動けば半分の時間で済むじやんつて計算？

どれだけものぐさなのこの世界の人は。

といふか動かれたら乗りにくいけじやない。そつ、凄く乗りにくいけじやない。

半ばパニックになりながら、それでもアンは片足を踏み出そうとする。

『エスカレーターにお乗りの際は、手すりに掴まり黄色い線の内側にお乗りください』

すると、どこからかそんな声が降つてきた。

「え、『』、『めんなさい！』

それに反射的に謝つて足を引く。黄色い線の内側……なるほどこれが。ああでもこれ動いてるし一段の幅も靴の大きさぴったりぐらいしかない。そもそも内側つてどつちだらう。今から入る訳だから

今私がいるのが外側？ ジャあ踏み越えて……いやいや一ブロックの奥側に印がついているんだから手前が内側か？ 線を踏んでしまつたらどうなるんだろう。

やつぱりこの階段に巻き込まれて死んでしまうのだらうか。異世界の人は樂をするためだけに、なんて危ないことをするんだらう。

悩み始めると、一向に足が動かない。

今はいなが後ろに人が来てしまつたりじよつ。良さん達は上がつてしまつた。アンが半泣きで階段の上を見上げると

「何をしてお前の前は！」

どかどかと音を立てて、良が動く階段を逆走してくる所だつた。「ダ、ダメですよ良さんそんな事しちゃ。ほら、上の人だつてしまいでくださいつて……」

「つるさいー 良いからさつさと乗れ」

動く階段にあわせて歩きながら、良が促す。

「た、タイミングが掴めなくて」

「こんなもの、余程でなければ巻き込まれたりはしないー！」

「やつぱり巻き込まれるんですか！？」

「ああもつー！」

どうしても乗ろうとしないアンに対し、良が手を差し伸べた。

「俺が手を引いたタイミングで乗れば大丈夫だー！」

「は、はあ」

「魔王の指示を疑うのか？」

「いえ……」

普通なら、魔王の言つ事など信じられるはずがない。

しかし、多分。

「お願ひします」

この人なら、自分を騙す事はないだらう。彼を魔王だと思つてゐるといふのに、何となくアンにはそう信じることができる。素直に彼の手を握る。

「お、おう、いくぞ、セーのっ」

良が手を引くと、つんのめるようにアンの体が前へ一歩出る。そうして彼女の体は、いつの間にか動く階段に乗っていた。

足をじりじりと動かし、黄色い線を踏まないよう調節する。

「あ、ありがとう」「ざいます」

「本当にドン臭い娘だなお前は」

その様子を見ながら、良が鼻から息を吐いた。

「え、えへへ、村でもよく言われました」

「やはりな。そいつらの気持ちがよく分かる」

そうだ、彼らも自分の事をそんな風に評していた。でも、良は、

彼は村人達とは違う。

「……でも、助けてくれたのは良さんが初めてですよ」

言いながら、アンは笑顔で彼を見上げた。

本当に、自分は彼らに助けてもらつてばかりだ。

「ば、俺は、その……」

それに対しても、慌てふためく良。彼もまた、褒められ慣れてはいいのかかもしれない。

「良さんって本当にしん……」「

微笑ましく思いながら、親切だと言いかけて、アンははつと口をつぐんだ。

そういえば、彼はこの言葉を特別嫌つていた。

「今何を言いかけた」

ほら、言おうとしていた事を察してこちらを睨んでいるし。

どうにか誤魔化さなければ。ええと、確かにいい人だと褒めても怒る。でも悪口もどうだろう。葛藤の末、アンは口を開いた。

「りよ、良さんって卑怯者が紳士服を着たよつな人ですねー」

「どういう例えだ!?」

「え、ええ!? 思いつきで悪さを称えたにしては、良い言葉じゃなかつたですか!?」

「……多分異世界人だからではないだろうが、お前の言語感覚はさっぱり分からん」

結局怒られた。良さんって難しい。

などとアンが考えている内に動く階段が終わりに差し掛かる。

良が再びアンの手を引き、そこから脱出させた。

「やつほー。大丈夫だったアンお姉ちゃん」

「あ、はい。良さんのおかげで」

一階で待っていた舞が、アンに手をひらひらと振る。

「まつたく。良い迷惑だ」

言いながら、良はアンから手を離した。

暖かい手だつたなど、アンはぼんやりと考えた。

「さ、次行こー」

舞が先導して歩き出す。

良の撫で技術の秘密は、あの手の暖かさにあるのかしら。などと
考えながら、少し跳ねる胸当ての奥を鎮めつつ、アンはその後ろに
続いた。

「うんこりのとかじうかな」

「え、でもそれだと露出が多過ぎませんか？」

「うん、だからこういうのを併せて普段は清純、こざとなつたら装甲ページしてがばーつて寸法な訳」

「な、なるほど、色々考えられてるんですね」

飾つてある衣服を一つ一つ眺めながら、舞がそれぞれに対し説明をしていく。

そのファッショング講座を、アンは熱心に聞く。

エスカレーターとやらを上がって二階に来たアン達は、そこで色々じり、種類も様々な服を物色していた。

「お兄ちゃんはどれがいいと思う？」

と、後ろで暇そうにしている良に、舞が問い合わせる。

「そこの安い奴」

「んもーお兄ちゃんは、安いって言つてもそれじゃ着まわしし難いでしょ。それならこいつちの……」

「はいはい。お前もこんなのに付き合わされて大変だな」

舞を適当にあしらいうながら、良はアンに視線を投げた。

「いえ、色んな服に色々な気持ちが籠つてるんだなって思つと楽しいです！」

「お前は良い事探しの達人か……」

アンが答えると、呆れた顔をした良は付き合つていられないとばかりに首を振つた。

「そういうえば、異世界の服はどういった感じなのだ？」「言つておくが、お前のようなファンキーの話はいらんぞ」

「私の場合……え？　あ、じゃあええと私のお姉ちゃんの話をしましょうか」

自分の普段着ている服について話すとした所で釘を刺され、ア

ンは仕方なく別の人間にについて話すことにした。

「へー。アンお姉ちゃんって妹なんだ」

「と言うか、お前の姉は一般人ではないのか。ビュセファンピーー家だろうと思つていたのだが」

「違いますよ。うちのお姉ちゃんは街と街の間の護衛をしたり、遺跡を探索したりする仕事の人です」

「冒険者か！」

「えーと、そう呼ぶのが良い方の言い方ですね。悪い方だと遺跡荒らしなんて言われますけど」

そんな風に解説しながら、アンはそういうえば姉と最後に会つてからもう一年は経つなと思い返していた。

元気だらうか。あんな職業なので何があつてもおかしくないが。

「それで、お前の姉はどんな格好なのだ。金属の全身鎧か？　いや、遺跡などに行くならば動きやすい皮製のものか？　それとも部分鎧的な……」

先程までは田だけをこちらに向けていたくせに、急に体をこちらに向け、詰め寄つてくる良。

その変貌に困惑しながら、アンは左右を見回した。

そもそも中々会う事のない姉を思い出したのは、この売り場にあつたそれを見た所為であった。

見つけたそれを指差し、良達に告げる。

「こんな感じです」

「こんな感じって……それがビキニージャン

「ビキニアーマーだと！？」

アンが指差したのは、カラフルな、今アンがつけている下着のような形状の、舞曰く水着と言つものだった。

これを見た時、アンはこちらにもこついう服があるのだなと感心したものなのだが……。

「ふざけるな！　こんなものが現実……えーと、現実で良いんだよな……現実に存在するというのか！？　何故だ！？　お前の姉が痴

女だという以外に理由があるのか！？」

「お、お兄ちゃん、どうぞ！」

アンに対し、先程よりも激しく詰問する良。

効率も何も、そんなの当たり前ではないか。半ば憮然としながらアンは答えた。

「えーと、だつて冒険者さんの体つて、鉄なんかより硬いじゃないですか」

「はつ！？」

「ほら、駆け出しだは無理ですけど、少し鍛えればこの屋上から飛び降りるぐらいは平気になるじゃないですか」

「ならねーよー！ ここ五階建てだぞ！？ エ、なら、ないよな？」

アンがきつぱり断言するので不安になつたのか。良が隣の舞に問い合わせる。

「このちの世界ではね」

すると今度は彼女がきつぱりと首を横に振り、アンが驚愕する番となつた。

「ならないんですか！？」

「ならねーよ！」

舞に自信をもつた形で、今度は力強く断言する良。

そうか、ここはやはり異世界なのだ。そういうえば先程の動く階段と言い、この世界の人々はやたらと樂をできる発明を生み出していよいよだった。

あれは怠惰なのではなく彼らがひ弱だからだつたのだ。

その土地の服飾、風俗には何かしらの理由がある。改めて納得しながら、アンはこの世界の人間にシンパシーを感じた。何故なら…。

「それで、お前の姉ちゃんは何故ビキー鎧なのだ」

故郷での事を思い出していたアンを、良の声が引き戻す。

それで立ち返つたアンは、急いで考えをまとめ説明をしだした。

「え、あ、はい。だから、半端な防具をつけるよりは体の動きを邪

魔しない格好をしたほうが、結果的に怪我が少なくなるんです。後は、依頼人に自分は強い冒険者ですよってアピールできるつてお姉ちゃんは言つてました

姉に聞いたままの知識だが、アンはなるべく良に分かりやすいように説明した。

「へー……ああいうのつてお色氣以外にも、ちゃんと理由があるんだね」

「ほ、本当に、物理的に硬いとは。RPGでレベルの上がったキャラが、裸でゴーレムに殴られても一ダメージなのが科学的に正しいとは……いや、科学だよなこれ。物理学か？」

納得の声を上げる舞。対して良はといえば、頭を抱え口調が変わり混乱しきつている。

他世界の常識とは、それが相手にとつて当たり前であればあるほどここちらにとつてはショックが大きいものだ。

アンには昨日今日でそれがよく分かつていて。

「……つうかこんな格好が主流なら、お前もケツ出しあり透けやらで騒ぐ必要はなかつたではないか」

頭を抱えたポーズのまま、はつと氣づいた様子の良がアンを見る。「あ、あくまで冒険者さんの話です！ 私はいくら丈夫になつてもああいう格好は流石に……」

彼の言葉に自らの痴態を思い出し、アンは赤面した。例え自分に能力があつたとしても、あんな格好で往来を歩くのはごめんだ。

「ていうか、本当にそのお姉ちゃん以外もそんな格好してるの？」

「え？ エーと……」

そういえば、アンは考えた。幾人が冒険者は見たことがあるが、確かに姉ほど薄着の人間とは会つた事がない。

「お前の姉が露出狂だつただけなのではないか」

沈黙したアンに、にやりと笑つて良が言つ。

「人の姉を痴女呼ばわりしないでください！」

「わつはつは、良いではないか、お前にもその痴女の血が流れてい

るのだー！」

「やめてくださいよーー！」

「わっはっはー！」

「一人とも、公共の場でそういう単語を叫びながらはしゃぐのやめて」

アンを大声で笑いながら胸をそらす良と、その胸をぽかぽかと殴るアン。

舞がそれを恥ずかしそうに止めると、慌てて周囲を見回してからアンと良はお互いに背を向けた。

「お、おう」

「「めんなさい」

「んもう、一人とも羞恥心は大切にしようね」

むしろ自分はここに来てから恥ずかしがつてばかりなのだが。

思いながら、アンはまた顔を赤面させた。

買い物に行つたアン達は、すっかり日が暮れた頃に帰宅した。この世界の生活必需品というものは思いのほか多く、ついでに夕飯までのデパートといつところで済ませて来たためだ。

そして、長時間家に残された子竜、キクだったが。

結果だけ言つてしまえば、この子竜の留守番は完全に失敗に終わった。

幼きドラゴンは良を待ちきれず、クッショーンを一つ破壊し、ソファーを酸で溶かし、冷蔵庫を漁り開け放しにし、中の食材をいくつかダメにした。

良は大いに怒り、結局きちんと留守番をすれば帰ってきた後キクを撫でるという約束は、破棄となつた。

そして次の日の朝。

アンは居間で洗濯物を畳んでいた。

「お兄ちゃんのナデナデを喰らいたての体で、半日も我慢できる訳ないのに」

妙に勝ち誇った顔をしているのは舞。部屋の隅で丸まっているキクを横目に、彼女はアンと向かい合わせになり畳むのを手伝つている。

兄とのスキンシップを邪魔されてから、彼女はキクに妙な対抗心を持つているようだ。

キクが暴れた理由はナデナデ中毒だったのか。良の下着を畳みながら、アンは改めて彼の指に恐怖を感じた。

「クッショーンはともかくソファーはどうすれば良いのだ。とりあえず布テープを貼つておくとして……」

件の良は、大きな穴の開いたソファーを前にぶつぶつと呟いてい

る。昨日も買い物が終わつたサイフの中身を見て悲しそうな顔をしていたし、魔王家の財源は底なしと言つわけではないらしい。

自分も節約には協力しようと、アンは決意した。

しかしそれはそれとして、良が呟く度彼の方を気まずそうに見、彼に気づかれる前に窓へと視線を向けなおすキクは少々不憫だ。「ま、まあ、ドラゴンがやつた事としては被害は極小でしたし。むしろ家が壊れてなくてラッキーぐらいに思つたほうがいいかと」自分の所為で帰りが随分遅れたという罪悪感も手伝い、アンはキクをフォローした。

「力が強いのは分かるが、そんなに凶悪なのか」といつは、

アンに言われ、良が胡散臭げな視線をキクに向ける。

彼は自分がどんな危険なものを飼つてているのか理解していないのか。アンは必死になつて説明した。

「あ、当たり前ですよ。普通の剣じゃ傷も与えられないし、魔法だって弱いものは届く前に消されますし、骨格はトカゲというより猫寄りで、大きくなればなるほど素早くなるんです!」
「へえ、と感心したようにキクを見る良と舞。

あまり恐怖した様子がないのは、例えに猫など出したせいだろうか。

「村娘の癖に詳しいな。例の姉の受け売りか?」

「それもありますけど、ドラゴンってやつぱり有名なんです」

「それはやはり、こいつが異世界最強の魔物だからか?」

「えーっと、実はドラゴンって、魔物じやないんじやないかっていう学説が有力なんです」

「魔物以外のなんなのだ、こいつが」

穴を避けてソファーに座りながら、良がキクを指差す。
少し考えてから、アンは答えた。

「ドラゴンってくくりの動物……ですかね。そもそも魔物というの

は、元々は魔王が作り出した生物つて意味らしいんですけど」

現在、アンのいた世界にいる魔物のほとんどは初代魔王が作り出

したもので、それらが交配しあつたり進化して種類が増えている。

人間の家畜、もしくは友として暮らす魔物もいるので、人類に仇名す生物を全て魔物とは呼ばない訳だが……。

「多分この世界にはないとと思うんですけど、私達の世界の主要な街とか道とかには、魔物避けの結界が張られているんです。魔王が毎回現れる北の大地デガメルギオから遠ざかるほど強い結界が張られていて……というか魔王はそれを近場から壊そうとするので、遠地ほど強い結界が維持されてるんですけど」

アンのいた村は北の大地から遠く離れており、彼女の通った泉への道もまた魔物避けの結界が張られていた。しかし。

「でもドラゴンは、それに引っかかるないです。いつでも、どこでも、どんなに結界が強くてもフラつと現れてその場所を破壊しつくすので、ドラゴンは有名なんです」

ドラゴンは魔物避けの結界の影響を一切受けない。そしてだからこそ、ドラゴンは魔物ではないのではないかと言われており、人々に恐れられているのだ。

「それは、えげつないな」

「最強っていうか最凶？」

それを聞き、ようやく顔を曇らせる兄妹。

舞が同じ発音の言葉を繰り返すが、アンにはそのニュアンスの違いがはつきりと分かつた。これも翻訳魔法の力だろうか。

キクがこちらを見、満足げに鼻を鳴らす。勘違いかもしれないが、どうやら恐れられて」満悦のようだ。

「そちらの方が正しいかもしれません。ドラゴンの制御ができる魔王は歴代でも一人だけで、その時は両方とも世界が本気で支配されかけた、もしくは一度支配されてしまつたそうですから」

だから、竜とは本当に恐ろしい生き物なのだ。普通の人間なら間違つても手元になど置きたくは無いのだが。

「そして俺が三人目というわけだ」

その言葉を聞き、良がニヤリと笑いを漏らす。

しまつた、余計な事を教えてしまつたかもしれない。良が世界征服の野望を持つ魔王なのだと久々に思い出し、アンは呻いた。

「そもそも魔王って、なんなの？」

舞がくりくりとした眼でアンに尋ねる。魔王の妹がそれを聞くのか。

改めて問われるとアンも困ってしまい、良の方を見る。

「魔王って、なんなんでしょう」

「俺に聞くな」

「え、だつて良さんつて、魔王の業務内容に憧れて就職を希望してるんじゃないんですか！？」

「魔王を職種のように言つたな！　俺はその、せつかく異世界に行くのだからでかい事をしてやるのと……」

「ノープランだつたんですねか……」

良の言葉に、半ば呆れるアン。良は何かやりたい事があつてあちら側に行きたいわけではなかつたのか。

では何故異世界になど来ようと思ったのか。アンは疑問に思つたが、同時に良がこちらを睨んで「それで？」と眼で尋ねる。

どうやらアンなりの魔王の定義を尋ねたいらしい。

「えーと、魔王っていうのは、とりあえず北の大地から現れて、魔物を従えて人間を襲う人、もしくは魔物の総称だと思います。大体五十年に一回ぐらい現れて、人類と戦争します」

思いの外あやふやな説明になつてしまつた。しかし前回の魔王が倒されてからアンは生まれ、今回の魔王に関しても、北のほうにそういうモノが出たという話しか片田舎の村には入つてこない。

ドラゴンとは違い、魔王とは謎に包まれつつも人々に恐れられる存在なのであつた。

「……スパンの長い祭りが自然現象のような奴らだな」

「良さんが収穫祭のような楽しいお祭り魔王になるといつのなら、私も喜んでこちらの世界に招待するんですが」

アンが苦笑しながら言つと、良は嫌だねと顔を歪ませた。それな

ら人類と共存できるのに。アンは口を尖らせながら、ふと思いついた事を言つてみた。

「大きい事をしたいのであれば、勇者様になつたらどうです？」

これなら成功すればこちらの世界で最大級の功績になりうるし、アンも彼を喜んであちらの世界に招待できる。

良い事ずくめだと思つたのだが。

「勇者……勇者だと？」

良は、こめかみに血管が浮き出るのではないかといつまど顔を歪ませている。

「ダ、ダメでしょうか」

「当たり前だ！ バカを言つた！ 勇者など、そちら辺に悩んでそうな奴がいればおせつかいに手を伸ばし、善意ですという顔をして、親切を押し付けるはた迷惑な職業ではないか！」

ソフナーから立ち上がり、ジエスチャーを加えながら自らが持つ勇者像を演説する良。

え、それのどこがいけないの？ とアンは思うのだが、彼にとっては大問題らしい。

何かまずいことを言つたでしょうかと舞を見ると、彼女は弱弱しい微笑みで首を左右に振つた。

「あー、そんな者になどなるか！ 僕はやつぱり魔王だ！ 魔王になるぞ！ よし！」

ついに良は自分の就職先について決意を固め、握りこぶしを作つて天に掲げた。

私、もしかしてとんでもない人に火をつけたが。初日は物理的に火をつけたが。

などとくだらないことを考へていると、良の顔がこちらを向く。

「よし、ではお前は俺様に今すぐ魔法を教えるのだ！」

そして彼は、突拍子もない事を言い出した。

「な、何で急に」

「昨日から考へていたが、お前の姉のようなターミネーターと戦う

」とを考えれば、やはり魔法は必須だ！

「タ、ターミ？」

意味は分からぬが、姉があまり良く言われていなければ分かる。良の言葉は続いているが何か言ひ返さなければとアンが考えた。「お前の世界には魔法が生活に密着しているのだろう？　お前どて魔法の一つや二つ、使えないのか！？」

が、その思考は、彼の言葉で一瞬にして霧散した。

魔法、そうだ。魔法だ。

「使え、ません」

「本当に何も使えないのか？　ほれ、手から小さな火を出す程度でもいいぞ」

「使えません！」

自分でも驚くほど大きな声が、アンの口から出た。

良はおろか、舞とキクまで自分を啞然とした顔で見ている。

「その、すみません。本当に、使えないんです。私の世界には、魔力に反応して動く耕作用の機械もありますが、それも使えません。私には、魔法を使う力が一切無いんです」

小声で、言い訳か、もしくは懺悔をするような調子でアンは語った。

むしろ彼女の世界では、機械と言えば魔力を動力にして動く物だ。アンはそれらをまるで動かす事ができなかつた。

何故なら……。

全て吐き出してしまえ、心の中で誰か呴いている。

「その、それは珍しい事なのか？」

「少なくとも、私の村にはいません……」

「で、でもほら、魔法が使えないぐらいなら気にすることないんじやないかな。別に機械が動かせなくとも他にできる」とは……」

「昨日、言いましたよね、お姉ちゃんの話」

「あ、ああ、露出狂の姉の話か？」

雰囲気を明るくする為か、良はわざとそうこつた挑発的な物言い

をしたようだつた。だがそれに乗ることは出来ず、アンは頷いて話を続けた。

「冒険者の、人間の皮膚が固くなるのも、ラーナ……魔力のおかげなんです。魔力を取り込んだ人間は、力も強くなりますし病氣にも強くなります。一般人でも、仕事や遊びでも体を動かせば、ある程度魔力が体に取り込まれます」

ちなみに、硬くなると言つても鉱石のように弾力が無くなる訳ではありません。むしろツヤは増します。そうアンは補足した。

そう、魔力を体に取り込むことは良い事尽くめなのだ。

それなのに自分は……。

「でも、私には魔力孔つていう、魔力を取り込む器官自体が無いんです。だから、仕事も人の半分しかこなせなくて役立たずでしたし、子供に受け継がれる事を恐れて、もらってくれる人もいませんでした。普通の人より肌を守る力も無いから肌だつて汚いし、凹凸だって少ないし」

言い出すと、自分でもその口が止められなかつた。おかげで、言わなくて良い事まで次々と口から出でしまう。

良はアンを一般人だ一般人だと言つていたが、自分はそれ以下なのだ。

……部屋に、沈黙が落ちた。

「アンお姉ちゃんの体、キレイだつたと思うけどな」

そんな中、ふと舞が呟いた。

「そんな、嘘ですよ……」

魔力が無い自分の体が、そんな風に褒められる物のはずがない。

アンの口元に、自嘲の笑みが浮かぶ。

そんな彼女の瞳を、舞がじっと見た。アンも思わず彼女の顔を見る。

「じゃあアンお姉ちゃんは、私のこと汚いつて思つ? 私も多分魔力穴だかは無いと思うけど」

「そ、そんなことありません! 舞ちゃんは、その、可愛いと思いま

ます」

舞の問いかけを、アンは勢いこんで否定した。そんな訳はない。彼女はアンから見ても魅力的な女の子である。

その返事を聞き、舞は満足げに大きく頷いた。

「うん、私も、魔力なんてなくてもアンお姉ちゃんのこと、キレイだし可愛いと思う。それじゃダメかな？」

そうして、首を傾げて再度問い合わせる。その言葉が、アンの心にすっと染みこんだ。

こんな事を言つてもらえるなんて。そしてそれを、こんなに素直に受け入れられる日が来るなんて。

「いえ、ダメじゃ……無いです」

喉を詰まらせながらアンが答えると、二人は同時に微笑んだ。

「お兄ちゃんだつてそう思つよね」

何か気まずそうにしている良に、舞が話を振る。

良はそれに対し、うつと唸つてから、あらぬ方向を見つつ口を開いた。

「ふん、お前がどう言おうが、俺にとってはお前なんてそこいら辺の人間と同じ一般人だ。少しごらい違うからと言つて調子に乗るなよ。というかそんな些細なことより自分の思考のポンコツさに恼め喋りながらどんどん首を反らしていき、ついには真後ろを向いてしまったので彼の表情は見えない。

それを見、舞は苦笑しながらアンに告げる。

「ほら、お兄ちゃんも『俺にとつて君が大事な女の子だ』っていう事には変わりないさ。少しごらい違うからって何さ。そんな事より君の優しさにカンパイ』つて言つてるよ」

「あ、そういう意味だつたんですか？」

「言つてねえよ！」

アンがパンと手を叩くと、良はぐりんと首を正面に戻し、真っ赤な顔でそう言い返した。

何だ、違うのか。何だか妙にがつかりし、アンは肩を落とす。

「その、お前がどう受け取る？が、それは勝手だが……」
すると彼は、今度は下を向くと、語尾を曖昧に濁しつぶやきつづけた。

「ふふ、じゃあありがとうございます」「ならば思い切り良いぼうに受け取つておけ。」

そう決めて、アンは良に礼を言つた。

やつぱり、ここの人たちは優しい。

魔法で使えない事に悩み、色々な事を試してきたのが馬鹿らしく思えてくる。

それを思い出し、ふと、アンの脳裏によぎった事があった。

「あの、それで思い出したんですけど、もしかしたらお一人にも魔法を使う方法があるかもしません」

「なんだと！？」

「お兄ちゃん……現金過ぎ」

身を乗り出した良の裾を、恥ずかしそうに舞が引っ張る。

それに苦笑してから、アンは説明を始めた。

今まで役立たずだと思っていた自分が、この人たちを喜ばすこと
が出来るかもしないと期待しながら。

「多分この世界の人にも、魔力孔はあると思うんです。あるけど、使つてない所為で凄く小さくなってるか、魔力塵つて言ひつ埃みたいなものが詰まってるんだと思います」

そうでなければ、いくら道具があつても召喚魔法などといつものを使えないはずだ。

自らも魔法が使えるわけではないので恐る恐るという感じになりながら、アンは良達にこれから行う事について説明を始めた。

話している最中、良は自らの腕を裏返したりしながらじっくりと見、舞は嫌そうに腕の埃を払うような仕草をする。

そんな事をしても見えたリ払えたりはしないのだが、それに苦笑しながらアンは話を続ける。

「それを解消する、魔力孔開放運動っていうものがあるんです。本来は魔力孔が広がりきつていらない子供や、魔力孔が弱つてきたりさつき言つた魔力塵が詰まつたお年寄りがやるものなんですけど」

「……ラジオ体操みたいなものか？」

「名前を聞くとデモとか集会とかしそうだけどね」

アンの講釈に、兄妹が顔を見合わせ交互に何か言つている。

ひとまずそれは放つておき、アンはそれを続けた。

「用途毎に運動の方法は違うので、お一人には効果が無いかもしれません。それでも良いですか？」

「ああ、可能性があるならそれで構わない」

「私もおつけだよ」

揃つて頷く二人。

やはり自分も覚悟を決めざるをえないようだ。アンは大きく息を吸つた。

「では、始める前に一つ注意をします。魔力孔解放運動はある意味神聖な魔法儀式です。途中で疑問、質問があつても絶対に口を挟ま

ないでください。絶対ですよ！」

そして、腰に手を当て、二人に強く警告した。

「あ、ああ、分かった」

「お、おつけ……」

気圧された様子で首を縦に振る一人。それを見、アンは自らも大きく頷く。

そうして、一人を立たせ、三人で居間の中央に立ち、彼女は体操を開始した。

「えーと、まずは腕立て伏せをしまーす。辛い人は膝をついてください」

言つと、一人が揃つてえ？　という顔をしたが、アンが率先して始めるとそれについてくる。

十回を越えた辺りで舞が、二十回を越えると良も膝をつきだしたので、二人とも体力は無い方なのかもしれない。三十回を越えた辺りで、アンは別の体操に切り替える。

「次は、胸の前で手を合わせて、十秒ほど押し合いまーす」

その際息を吐き、胸の筋肉を意識してという注釈も忘れない。それを五セット繰り返した後で、アンはなるべく自らの言葉を意識しないようにしながら一人に告げる。

「右腕を持ち上げて、その、右の胸を左手で持ち上げます。反対側も同じように」

少々恥ずかしいが実践して見せると、良が一瞬固まるが、舞に小突かれ真似をする。

「脇の下から、ち、乳房までお肉を集めて、寄せます」

「なあ、これって……」

言いかけた良を、アンが睨む。それに押され、良は再び口をつぐんだ。

「乳房をゆっくり揉みます！」

良が黙るのを確認すると、アンはやけくそ氣味にそう宣言した。

そうしてから、自らの乳房に手を当て、おずおずと動かしだす。

兄妹が同じ角度で首を捻りながら、それに従つた。

そうして、それから彼らは一十分ほどその体操を入念に行つた。

「しゅ、終了です」

中盤からは赤面しつぱなしだったアンは、熱い息を吐きながらそういう宣言する。

しばし、彼らは無言で息を整えた。

そうして、一番最後に息が整つた様子の良が彼女に叫んだ。

「バストアップ体操じゃねーか！」

彼女が行つた体操は、その後に行われた物も含め、全て胸、もしくは胸筋を意識させるものばかりだった。

流石に良達も気づいたらしい。というか前半に気づいてずっとお預けを喰らつっていた所為で、それが言えた今、若干すつきりとした顔をしているぐらいである。

「ち、違います！ 魔力孔を開放する効果もあります！」

「もつて言つたね、今」

舞が容赦なく指摘すると、アンはのの字でも書きそつた様子で背中を丸め俯いた。

「だつて、この運動を行うと、今まで眠つていた魔力孔が胸から花開いて、劇的な魔力の向上とバストアップ効果が望めるつて触れ込みだつたんですね……」

「両方得られなかつた訳だ……」

「む、胸は少し大きくなりましたもん！」

「昨日はつきりとAだと聞いたぞ」

「お、お兄ちゃん！ Aでも十センチの幅があるんだからね！ ギリギリAとA A Aじや全然違うんだから！」

何故か舞の方から抗議が入り、良はため息をついた。

「はいはい、分かつた分かつた。しかしこれではやはり、効果は期待できそうにないな」

「そ、そうですよね」

落胆した様子の良に、アン自身も気持ちが萎えてくる。

アンも夜な夜な試しては、呪文を唱えてみてガツカリしたものだ。そんな彼女を横目で見、ふんと鼻を鳴らしてから良が呟いた。

「ま、試してみるだけ試してみるか」

はつと顔を上げたアンから無理に顔を背けるようにしながら、良は手をプラプラと振った後、前に伸ばした左手首を右手で掴んだ。そして彼は、静かに目を閉じ呟く。

「異界に眠る紅蓮の炎よ……」

「え？」

それは、呪文の詠唱であった。

「我レ魔王也、我ガ契約ニ従イその力を示せ！」

「契約なんていつの間に」

もしかして、例の魔道書とやらに記されていた呪文なのかもしれません。

そう思い、舞を見るが、こちらは何だか頭痛を我慢しているような表情で、こめかみに手を当てている。

「グレーター・ブレイズ」

ついに出来る。アンは身構えた。

「オブ」

が、詠唱はまだ続いていたようだ。がくっと体の力が抜けた。

「デスブラックファイヤー！」

良が呟えた！

「……」

そしてまるで予定調和のように、沈黙が響いた。

声をかけようか迷っているアン。呆れた表情の舞。良の足元へと歩み寄り、鼻をピスピスと鳴らすキク。

「イグニッショ オオン！」

「あ、往生際が悪い」

気まずさを誤魔化すように、良が叫んだ。

しかし、やはり何も起きない。

呪文は格好良かつたですよ。と、アンがとりあえずフォローしよ
うかしらと口を開いた瞬間。

「ゴトリ。と、音がした。

何事かとアンが周囲を見回していると。

「よつしやあああ！！」

良がガツッポーズを作り、歓声を上げていた。

「え、なに、何が起きたんですか？」

問いかけると、彼は感極まつたのか目頭を押さえながら、先程まで掌を向けていた机の上を指差した。

そこにはペットボトルと言つたか透明な容器が一本。それが倒れて中身がトクトクと零れていた。

「た、大変。良さんこれ倒れちゃつてますよー 雜巾雑巾！」

アンは慌ててテーブルに駆け寄ると、良に呼びかけた。しかし彼は芝居がかつたポーズでバツと手を振ると、彼女の言葉を否定する。「違う！ 倒れたのではなく俺が倒したのだ！ この魔法で！」

「え、魔法？」

聞き返しながら、とりあえずペットボトルを立て直そと手を触れる。

「ひうつ！？」

すると指先に異様な感触がし、アンは慌てて手を引いた。

「な、なんか今ヌルつとしました！」

ペットボトルの底に、何やら半透明のヌルツとした物がこびりついていたのだ。

どういうこと？ とアンが良に困惑の視線を向けると、彼は腕組みをしながら高笑いを始めた。

「フハハハ！ つまりその液体は、摩擦係数を限りなくゼロにするほどの強力なグリースなのだ！ しかも物体と物体の間に割り込ませることができる！ それが机の僅かな傾きに反応し、その安定性の高いペットボトルを事もなく倒れさせたのだ！」

「はあ……」

笑いながら良は解説をするが、彼のはしゃぎよう口若干引いているアンにはよく理解できない。

すると、同じじよひつな表情をしている舞が、テーブルへと近づいてきた。

「呪文名から察するに間違いなく意図した魔法じゃないのに、よくそこまで解説できるねお兄ちゃん」

ていうかペットボトルの蓋開け放しにして置かないでよ。などと文句を言いつつ、彼女はテーブルを覗き込む。

「うつわあ、何か気持ち悪い。えーと……ペロリ。何だろこれ、

甘苦いね」

「フハハハハハ！ この魔法はゼロリバースと名づけるかゼログリップと名づけよー！」

気持ち悪いと評した物を平然と指で掬い舐める妹と、今使った魔法に早速名前をつけ始める兄。

なんだろうこの兄妹。自分たちのこの人達の言葉で感動したはずよね。

ペットボトルを流し台にもひって行きながら、アンは何だか涙が出そうになつた。

「よし、我が妹よお前も何かやつてみひー。」

「アイサー」

アンが雑巾を用意している間にも、兄妹は話を進めている。

「使いたい魔法を強くイメージするのだ！ すると…」

「違う魔法が出るんでしょ？ どうすればいいのかな、アンお姉ちゃん」

すっかり魔法の講師気取りの良を無視し、雑巾でまずはテーブルから拭き始めたアンに尋ねる舞。

「え、えーと、目標を見つめて集中しつつ、深くゆっくり魔力孔で呼吸するような感覚を持ちながら、落ち着いて出すと良いらしいです」

いいのかなと思ひながらも、アンは姉に聞きかじつた知識を、彼女に教えた。

「分かつた、やってみる」
頷くと、舞は数回深呼吸をした後、良しと呴いて呪文を唱え始めた。

「異界に眠る紅蓮の炎よ……」

「おい！」

詠唱をそのまま使われた良が、抗議の声を上げる。
しかし、アンには見えた。舞の周囲に懐かしきラーナの淡い緑光が浮かび上がるのを。

そうか。この世界のラーナはあちらよりずっと薄いのだ。それが集まるところやつて目に見えるようになつて……。
「良さん伏せて！」

「へ？」

嫌な予感がし、アンは自らもしゃがみながら良に叫んだ。
同時に、舞の魔法が完成する。

「デスマライヤー！」

ボン！ 叫びと共に、良と舞達の中間辺りに火の球が出現した。
アンが両手でやつと抱えられるほどの大さで、表面を火の粉が踊つている。

「で、出たあ！」

一番驚いているのは、出した張本人である舞であった。彼女が慌てて体を捻ると、それに合わせて中空の火球が踊る。

「ば、バカ何出してんだ！ 早く仕舞え！」

「し、しまうつてどうやって！？」

頭を抱え伏せた良が舞に叫ぶ。しかし彼女自身も混乱し、どうして良いか分からぬようだ。

もちろんアンも、出しかけた魔法を中断する方法など知るはずがなかつた。

自分のせいで大変なことになつた。どうしようと混乱する頭の

中で、ふと閃き、アンは良に叫んだ。

「良さん、キクちゃんを近づけてくださいー！」

「え、あ、わ、分かった！」

アンの声に、良が頷く。

彼は隣で自分の真似をし伏せていたキクを拾い上げ、火球に投げつけた。

途端。

パーン！ と音がして、火球が弾け飛ぶ。

飛んできたキクを慌ててキャッチするアン。

ドラゴンの持つ、自らを傷つける魔法を無力化する特殊能力の効果である。

しかし自分は近づけると言つただけなのに、躊躇いなく炎の中に投げ入れるとは。

やはりこの男、天性の魔王なんじゃないかしい。

アンは腕の中にいるキクと顔を見合わせる。

「やつたー！ 魔法使えたー！」

そんな彼女達に構わず、舞が嬉しそうに部屋中を飛び跳ねた。呪文を唱える前は冷静に見えたが、やはり彼女も魔法を使いたかつたらしい。

普段は背伸びをしている様子の舞が年相応にはしゃぐ姿を見て、アンは微笑ましく思った。

「今のは使えたとは言わんだろ！」

「でもお兄ちゃんと違つて、思つた魔法出せたもんねー」

「んだとー？ あれは詠唱フェイントと言つ高度なテクで……」

「あ、お兄ちゃんそこ燃え移つてゐる」

「のわーーー！」

舞に食つて掛かる良が、彼女の指摘でカーペットに燃え移つた火を必死で消す。

異世界人に、自分には使う事のできない魔法を使われた。

彼らに教える前、それはもっとショックな事だと思つていた。

しかし今、魔法を使えるようになり喜ぶ彼らを見ても、アンの胸には思つたほどの嫉妬も憂鬱も沸いては来ない。

それどころか、教えて良かつたという喜びが胸を満たした。

何故だろう。考えてはみたが、明確な答えは浮かばなかつた。

「この家つて、本当に壊れてばかりですね」

「大元の原因のお前が言つな！」

まあいいか。楽しいし。

魔王に魔法を教えてしまつたというのに、アンの胸には爽やかな気持ちが広がつていた。

アンが良達に魔法を教えてから一週間後。

風呂から上がったアンは、息をつきながら階段を上がっていた。初日からの流れで、舞とずっと一緒に入浴しているのだが、いい加減あのスキンシップはやめてくれないだろうか。

「しかも自分がのぼせちゃうし……」

そんな訳で舞は、バスタオル姿で居間のソファーアに寝ている。もう寝てしまおうか。それとも舞に借りた本でも読もうか。アンはそんな事を考えながら足を動かす。

彼女が現在読んでいるのは、この世界の流行ファッショングや漫画等が載っている「カチューシャ」という本だ。

月刊誌であるそれをバックナンバーから辿つて読んでいるのだが、その中でもアンは、地味な女の子の前にイケメンロック歌手が現れて恋人になつてしまふ話が好きだった。

イケメンロックの意味はよく分からぬが、勇者様が自分を迎える事によく夢想していたアンとしては、主人公にとても共感できる。

新たに増えたギタリスト、ドラム、シンセサイザーとの関係も気になる所だ。

要するに勇者様と魔法使いと僧侶と戦士に同時に告白されるようなものよね。どうしましよう。

意外にミーハーであるアンは、そんな想像をして一人悶えた。

「まあ、私が同居してるのは魔王様だけど……」

それも見習いというかそれ未満の男である。

悪い人じやないんだけどね。と、魔王としても男としても喜ばれない評価を件の男につけながら、アンが一階へと辿り着く。

カツ。カツ。と、何かがぶつかるような音が聞こえてきた。

何事かと、アンが音のする和室を覗き込むと。

「ああ、お前か」

悪くない魔王、良がノミを手に何かを突いていた。

「何をしてるんですか？」

「儀式の……準備だ」

近づき、手元を覗き込むと、良が顔の横に降つてきたアンのお下げを煩そうに叩く。

「ごめんなさいと謝つて、アンは彼の向かい側に座り直した。

風呂上りのアンのおさげは、普段のような両側に垂らす三つ編みではなく、ゆるく結んだ太い一本の物となっている。

シャンプーにリンス、ドライヤーというカガクの結晶のおかげで毛艶が増し、最近は櫛を通すのが楽しくて仕方ない。

「儀式って、異世界への穴を開くという例の」

「他に何がある。まったく、お前の所為でとんだ手間だ」

ぶつぶつと文句をいう良が持っているのは、円形の板だった。

溝に何やら紋章が刻まれており、貧乏な宗教家が使う聖印のように見える。

「これが儀式に使う触媒なんですか？」

「ああ、こここの溝が緑色に染まっているだろう。この色は時間と共に溝を沿つて広がっていくのだ。なのでこれが端まで染まつたら魔道書の通りに次の溝を掘る。するとそのラインに色が付くので、それが端まで来たらまた彌る。この繰り返しだ」

丁寧に説明する良は、いつもより機嫌が良さそうに見える。

こういう細かい作業が好きなのだろうか。

微笑ましい気分で、アンはそれを見守った。そして彼が話し終えた所で、ふと思いつく。

「へー、溝が……あ、これってもしかして癒樹ですか？」

「癒樹？」

「えーっと、自らの傷を、大気に漂つテーナを集めて癒す木です。その性質を利用して、傷薬とか秘薬を作るのに使われるんですよ」

アンの家の三軒隣にも、その養殖をする人間がいたのでよ

く覚えている。

「そうか、この世界はないのか。首を捻る良に説明すると、彼は

「ほう」と息を漏らし、興味深げに印を眺めた。

「ではこの縁のラインは、魔力が凝縮したものか」

要するに、こちらの世界の人間に足りない分の魔力を、これを媒介にして補おうという事だろうな。などと考察する良。

彼が自分の世界を理解したのが少し嬉しくて、アンは笑顔で頷いた。

「はい。ラーナに触れさせすぎるとそれを消費して傷を治してしまって、普通は上に特殊なニスを塗るんですけど」

「うむ、それも後で塗らなければな。上級異世界ゲートセットの場合スプレーなのだが、三万も余計にかかるので手が出せなかつた」アンがおじさんの仕事を思い出しながら尋ねると、やはりニスもあるらしい。

頷きながら線をなぞる良。彼の話では、確かに時間をかけ過ぎると印から線が消えてダメになってしまふのだそうだ。

「あの、前から気になっていたんですけど、良ちゃんってその魔道書と道具一式をどうやって手に入れたんですか？」

「この世界において魔法が一般的な技術ではないことは、アンにもとうに理解できている。

ならば良はどうやって魔法という力を知り得、儀式を執り行うことが出来たのか。

アンが問いかけると、良はぽつりと答えた。

「通販」

「つ、つ、はん？」

短すぎる答えに、アンは啞然となる。

そんな彼女の表情を見て、良は一旦印を新聞紙の上に置くと説明を始めた。

「お前がよく読んでいる雑誌の裏側にも書いてあるだろ？。ここに電話して金を払うとこんな物と交換しますよと言う奴だ。とかいうか

お前、ああいう雑誌ばかり読むのは感心せんぞ。間違いなく、偏った知識が身につく

後半はただの説教である。なるほど。と納得しつつ、アンはそれはそれとして思いついた事を言った。

「良さんって、お父さんみたいですね」

「な、何を言ひー。俺はお前のボケがこれ以上進行されでは困ると思つてだな！」

慌てふためく良がおかしくて、アンはくすくすと笑つた。
風呂上りでも無いのに顔を赤くした良が、視線をそらしながら咳く。

「……俺も適当にサイトを巡つていて、偶然見つけただけなのだがな。シャレで買ってみたが、まさか本物だとは」

「探していく見つけた訳じやないんですか」

「まさか。本当に異世界などあるとは思つていなかつたからな」

「ふうん……そなんですか」

少し不思議な気がする。良も舞も、アンの世界について大よその知識を有しているのに、その存在は信じていなかつたと言つ。

あのテレビの中の人を動かすあのゲームというもののや、アンも読んでいる漫画などで得た知識だという事は聞いたが、ならばそれを作った人達は自分のようにあちらの世界に行つた事があるのかしら。それなら何故あちらには、この世界のことが伝わつていないのだろう。

もしかして都会ならこちらの世界と交流が盛んになつていていたりして。アンはそんな事を考えてから、意識を目の前の良に戻した。

「そういえば儀式つて、後どれぐらいができるようになるんですか？」

尋ねると、良は電燈に板を透かすようにして見ながら答える。

「このペースだと、あと三週間ほどだな。前回よりも溜りが早い」

「三週間……ですか」

その返答に、アンは複雑な表情を浮かべた。

「なんだ。」それ以上は縮まらんや。……そもそもの原因はお前なんだからな

「い、いえ、そりじゃないんです。私なんて誰も心配してないでしょうし

言つてしまつてから、良が顔を曇らせた事に気がつく。

「あ、あの、良さん？」

しまつた。そんな事を言つべからではなかつた。アンの胸に後悔が沸く。

「じめんなさ

「悪かった

謝るうとしたアンの声に被さつて、信じられない声が耳に届いた。一瞬、呆然となつてからアンは理解する。

「あ、良さん。今久しぶりに誤翻訳が出ました。何と良さんが謝つて……」

「謝つたんだよ。」

「ええ！？」

完全に通訳魔法の誤作動だとだと悟つたのに、そうではなこらしい。

アンは驚愕の声を上げ、信じられないまま彼に問つた。

「な、なんで良さんが謝るんですか！？」

「その、あまり言いたくない事を言わせたからな……この間、魔法を教わつた時にも

「一週間も前の事じゃないですか……」

「つるわーい！ タイミングが無かつたんだよ。」

アンがつっこむと、良は真つ赤になつて彼女に言ひ返した。どうやら彼は、その事をずっと気にしていたらしい。

「ふふつ

「な、なんだよ。じゃない、なんなのだ……」

不器用な彼の優しさを、アンは嬉しく思つ。

舞にしてもそうだ。彼らはアンに良くしてくれて、そして彼らと

過ごしたこの世界は楽しかった。

だからつい、アンは口に出してしまった。

「その、だから全然気にして無いです。むしろ、もひひょと長くここに居たいなあって」

伺うように、チラリと良を見る。催促をした訳ではない。そうではなく、それを言つたら彼がどんな表情をするか、それが見たかった。

しかし良はむうっと唸り、仮面面をしたままである。

二人の間に妙な沈黙が落ちた。

それから、アンは自分の言つた事に気付いて慌てて訂正を入れた。

「な、なんて、無理ですよね！ あはは」

「あ、当たり前だ！ お前のよつな『く潰し』をこれ以上養つていら
れるか！」

予想していたリアクションだったが、そつ声高に言わると腹が立つ。

先ほどの沈黙が妙に照れくさくもあり、それを誤魔化すためにアンは声を張り上げた。

「りょ、良さんだって一田中家で『口』『口』しているじゃないですかあ
！」

「俺は夏休みだから良いんだ！」

指摘するが、良は胸を張り、むしろ誇らしげだ。

夏休みとは、要するに暑過ぎて身が入らないから長期休暇をとりましようという仕組みらしい。

良も舞もそのおかげでここ数日、買い物以外はずっと家にいるのだが。

「舞ちゃんは家事とか手伝ってくれるのに、良さんは全然手伝つてくれないし」

「お前に召使いとしての直覚が芽生えるよつ、ワザと『口』『口』しているのだ！」

「良さんはいつもやんな子供みたいな事を言つて！ この前もせつ

かく作ったシチューを二ンジンだけ舞ちゃんに押し付けてたじやないですか！」

「つむれー！ 人間は嫌いな物を無理に好きになる必要は無いのだ！」

ましてや俺は魔王だからな。と開き直る良。

二ンジンが弱点の魔王など、誰にも恐れられないと思つたが。色々と彼の将来が心配になり、アンは忠告してみる事にした。

「好き嫌いばかりしてると、勇者様に退治されちゃいますよ」「子供用の脅し文句か！？ つか何食おうが退治しに来るだらア

イツ！」

良が子供みたいな文句を言つから、自分も子供を注意するように諭したのに。

憤慨する良に、アンもまた頬を膨らませた。

……アンの村では、実際に子供を叱る際、そのような脅され方がよく使われていた。

もつとも、普通は「悪い事をしていると魔王に攫われちゃいますよ」なのが。

「どうか、勇者なんて本当にいるのか？ 困つている人間を無償で倒して世直し、なんて人間が」

「いますよ！ あ、いえ、何で倒すんですか！？ 勇者様は人を助けるんです！」

発言を慌てて訂正するアンに、良がにやりと笑つた。

本当に悪戯好きの少年のようだ。アンは膨らませた頬から息を抜く。

「ふん、信じられんな。そんなお人好しがいるなどと」

「本当にいるのに……だつて私、会つた事ありますもん」

「はあ？ なんでファンタジー一般人のお前が、勇者なんてものと知り合う機会がある」

アンが呟くと、良は胡散臭げな視線を余計に強めた。

何故この人は私の言うことをいつも信じてくれないのである。

くやしくなつて、アンはその時の事を必死で話し始めた。

「あれは、私が十歳の春を迎えた時でした。私は水を汲みに村の入り口まで行つたんです」

その時の情景が、アンの頭には今でもはつきり浮かぶ。

当たり前だ、憧れの勇者との邂逅なのだから。

「するとそこに、質素な服と片手に棍棒を持った見慣れない方がいらっしゃつしゃつて」

「まさかそれが勇者か？ 不審人物じゃなく？」

話の途中で良が口を挟む。その目は不信を通り越して可愛そうなものを見る目に変わり始めていた。

「そ、そうですよ！ その頃はまだ駆け出しだったので、きっとお金が無かつたんです！ その、私だってそれが勇者様だつて知つたのは、後で皆が話してゐるのを聞いてからでしたけど」

よくよく考えれば、現在もそつだがあの頃は魔王が世界侵略をしていた時期である。

それを服一枚棍棒一本の一人旅をしている人間が、普通の人間であるはずが無い。

良にそれが伝わるか心配であつたアンだつたが、彼は「なるほどレベル1だつたのか」と妙に納得した様子で頷いて、アンに話の続きを促した。

「まあ良い。それで？ まさか見かけただけじゃなからうな

「ち、違います！ ちゃんと話もしました！」

「どんなん？」

尋ねる良に、アンは頭でその時の情景を思い浮かべながら語つた。
ああ、今でも思い出す。まだ肌寒い朝の空氣の中、一枚の布に頭を出す穴を開けただけのような服を着た青年が、鳥肌を立てながら彼女に話しかけてきたときの事を。

そして自分は、彼に答えたのだ。

「勇者様がここは何と言つ村ですか？ つて水汲みをしている私にお聞きになつたので、私は『ここはアチューンの村です』って答え

ました！」

言い切り、どうだとばかりに胸を張るアン。なんたつて勇者と話したのだ、これには良も驚くだろ？。

ちらりと彼の顔をうかがうと。

「……ふつ

良が、噴出した。

「ぶあははははは！　お前それじゃRPGの村人Aだらうが！　まさかそこまで典型的だとは思わなかつたぞ！」

「え、え、え、何で笑うんですかー！？　ちょっと、良さん！」

どうして彼が笑うのか、アンには理解できない。

「んもう……」

しかし、大口を開け楽しそうに笑っている良を見ていると、何だから自分で楽しくなつてくる。

あと二週間。とにかくこの世界を一日一杯楽しむつ。アンはそう決意した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6193z/>

魔王家の村娘A

2011年12月21日21時08分発行